

## ファカルティ・ディベロップメント報告書 2006



2007年3月

教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会

## はじめに

昨年度とほぼ同じ委員構成で迎えた2年目のFD部会を終えるにあたり、その活動をまとめました。2005年度は、活動ごとに議論を重ねながらの試行錯誤で事業を進め、その議論の内容や実施データ、および研修資料をそのまま報告書に保存することとした結果、この種の報告書としては大部のものとなりました。2006年度もなお試行錯誤を続けましたが、事業形態がある程度定着化してきたので、今年度の報告書は、重要な情報に絞りスリム化するとともに、法人化後のFD活動に資するものとなるよう取り纏めました。そして、最終章には、2年間のFD活動を通してのFD部会委員の意見や感想を掲載しています。今後のFD事業の参考になれば幸甚です。

多くの大学教員は、熱心に研究をして、積極的にその成果を学会に発表し、論文にします。学会は研修の場であり、発表は評価を受ける行為です。論文執筆は、研究内容を整理し、分かりやすくまとめる行為であり、論文審査は外部評価に他なりません。ところが教育という面では、どうでしょう。授業や教育の方法についてほとんど学ぶことなく教員になっているにもかかわらず授業評価や授業公開によって自分の授業の内容や方法を評価してもらうこと、あるいは教育者としての研修を受けることには今ひとつ関心が乏しいように思われます。

大学全入時代の今、学ぶ意欲を持った学生たちばかりではありませんし、インターネット上にはありとあらゆる情報が掲載されています。このような状況で、教員自らが昔学んだのと同じ方法で学生たちを教育することには無理があり、この時代にふさわしい大学教育の方法を模索していかねばなりません。

今年度最後のFD研修で講師をしていただいた玉川大学コア・FYE教育センター副センター長の菊池重雄先生と研修会のあと少しお話をしました。その中で「FD部会長がいくら熱意をもっていてもFDは普及しない。その熱意をどのようにして教員に伝えるかにつきる。」とのアドバイスをいただきました。本学では、私だけでなく、FD部会委員にも十分な熱意がありました。しかし、その熱意が全教員に波及するには、まだ道半ばの感があります。

2007年度から法人化に伴い、FD部会は教育学習支援チームに継承されます。FD部会は教務委員会の下部組織のために動きにくい面もありましたが、新体制では教育担当理事のもとに、より迅速で柔軟な活動が可能になると思います。これまでの蓄積をもとに、FD活動がより深く浸透し、より多くの教員がFDに関心をもつようになることを祈念してやみません。この2年間、部会長が未熟なため、ご不満も多々あったかと存じますが、多くの教員のご協力によりFD事業を少しは前進させることができたのではないかと思います。ここに、各位に感謝申し上げます。

2007年3月

FD部会長 菊沢 正裕



## 目次

はじめに	i
1. FD部会	1
1.1 FD部会	1
1.1.1 部会の構成	1
1.1.2 活動概要	1
1.1.3 議事録	2
1.1.4 経理資料	7
1.2 FDサイト	8
2. 授業評価	9
2.1 指針	9
2.1.1 前期アンケート指針	9
2.1.2 後期アンケート指針	9
2.2 授業評価アンケート	10
2.2.1 方法と結果	10
2.2.2 結果の分析	24
3. 授業公開	27
3.1 授業公開の意義	27
3.2 スケジュールと指針	27
3.2.1 スケジュール	27
3.2.2 指針	27
3.2.3 授業公開・討論会の進行	28
3.3 前期の実施概要	29
3.3.1 実施実績	29
3.3.2 実施教員による授業公開の報告より	30
3.3.3 前期授業公開の総括	31
3.4 後期の実施概要	32
3.4.1 実施実績	32
3.4.2 実施教員による授業公開の報告より	33
3.4.3 後期授業公開の総括	33
3.5 今後に向けて	34

4.	FD研修	35
4.1	概要	35
4.2	新任研修	37
4.3	ワークショップ	37
4.3.1	コミュニケーション研修	37
4.3.2	eラーニング活用セミナー	38
4.3.3	インストラクショナル・デザイン	40
4.3.4	看護実践能力を保証するための教育改善の取り組み	41
4.4	講演会	44
4.4.1	1年次教育の現状と課題	44
4.5	学外研修	46
4.5.1	平成18年度看護学教育ワークショップ	46
4.5.2	法政大学第4回FDシンポジウム	51
5.	調査研究 ―厳格な成績評価について―	53
5.1	「大学改革実践プログラムC-19 成績評価の厳格化」への対応	53
5.2	厳格な成績評価とGPA	53
5.3	GPA導入に関するFD部会における議論	54
6.	回顧：FD部会を閉じるにあたって	56
	おわりに	58

# 1. FD部会

## 1.1 FD部会

### 1.1.1 部会の構成

2006年度の教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会（以下、FD部会という）は、下のとおり、委員10名、事務局2名（後期は1名）の計12名（後期は11名）体制で活動した。この2年間で、会議やデータ処理を担当する事務員が毎学期交代し、授業評価の集計など特殊な処理をするため継続性が保たれず、担当者の苦労も大きかった。通常の委員会と違い、学会開催の実行委員会のような事業実施組織であることを考えると、今後は担当者の頻繁な異動がないような配慮が望まれる。

事業それぞれに、部会員相互の協力が不可欠であるが、責任体制を明確にするために、今期も主たる担当事業を委員に割り当てた。ただし、一部を除き、昨年度と担当をほぼ同じにした。

2006年度FD部会委員名簿

氏名	所属	職	役割	担当事業
菊沢 正裕	情報センター	センター長	部会長	総括、部会・HP運営
服部 茂幸	経済学科	助教授	委員	授業評価
田中 求之	経営学科	助教授	委員	授業公開
日比 隆雄	生物資源学科	助教授	委員	授業評価
神谷 充伸	海洋生物資源学科	助教授	委員	小浜キャンパス担当
細谷 純子	看護学科	講師	委員	授業評価
瓦井 昇	社会福祉学科	助教授	委員	授業公開
片山 智彦	学術教養センター	助教授	委員	研修・部会長補佐
津村 文彦	学術教養センター	講師	委員	授業公開
松村 清雄	教務課	課長	委員	事務統括
紙谷 和子	教務課	総括主任	事務局	経理および事務(後期)
永井 徹	教務課	主任	事務局	事務(前期)

### 1.1.2 活動概要

授業評価は、前後期各1回実施した。前期より、クラス内分布を把握できるように標準偏差値を導入、また後期より、オムニバス授業で教員ごとに授業評価を実施できるようシステムを改善した。授業公開は、前期に15コマ公開したが、参観者はのべ17名（1,2名のコマが多かった）と少なかった。そこで後期は、公開授業を部局ごとに企画、4コマで参観者のべ27名を得た。FD研修は、新任研修、ワークショップ開催4回、講演会1回、学外研修2件である。その他、授業評価結果の分析、それと関連してGPAの導入の議論を行った。部会は事業の前後を目安に4回開催した。

### 1.1.3 議事録

#### ■ 第1回議事録

- 開催日 平成18年5月31日(水)
- 開会時刻 13時00分 閉会時刻 14時30分
- 開催場所 管理棟評議会室(福井キャンパス), テレビ会議室(小浜キャンパス)
- 出席者 菊澤(議長), 田中, 日比, 神谷, 瓦井, 片山, 津村, 細谷, 松村
- 欠席者 服部
- 事務局 紙谷総括主任, 滝波主査, 杉村主事(小浜キャンパス)

#### 議 事

平成17年度第6回ファカルティ・デベロップメント部会議事録(案)について承認された。

#### 【報告事項】

1. FD報告書2005の配布について
  - ・ 配布先を報告。部数不足につき、授業評価に参加しなかった。
  - ・ 非常勤は希望者のみに配布。在庫25部、図書館FDコーナー3部
2. 18年度新任教員研修の実施
  - ・ 新任対象の事務説明会(4月20日)で平成17年度のFD活動と18年度の方針を説明した。

#### 【協議事項】

1. 平成18年度の部会活動について
  - ・ 部会開催日程について、資料案を了承。
  - ・ 活動方針、事業種目について、協議した。役割分担は資料案を了承した。
  - ・ 基本的に平成17年度後期の方式を踏襲し、授業評価・授業公開・研修を行う。FD活動について学内で話し合う場としてのFDセミナーは必要な場合実施する。
  - ・ 授業評価は、過去5期の活動記録が蓄積されていることからデータ分析を積極的に行っていく。
  - ・ 授業公開は、授業公開参加者と参観者の拡大を図る工夫をする。
  - ・ FD研修は、予算を眺めて、部局または学科の意向に重視して進める。学外研修は、予算の範囲で支援する。
2. 平成18年度の事業計画について
  - ・ 平成18年度予算について事務局から報告
  - ・ 平成18年度の事業計画(特に前期)
    - 授業評価: 7月10日~24日, 詳細は後日決定
    - 授業公開: 6月26日~7月7日, 詳細は後日決定
    - 研修: 学科単位でテーマを募集する, 6月15, 30日(海洋), 7月3~4日(生物)は決定済み。後者は全学的に案内するかどうかは未定。
  - ・ その他

GPAやCAPについては、大学基準協会の要求項目になっているので、議論を進めるべきではないかとの意見があり協議の結果、教授会マターではあるが、啓蒙活動を中心に。そのために、資料調査(田中部員)を少しずつ進め、機会をみて議論する。

## ■ 第 2 回議事録

- 開催日 平成 18 年 8 月 7 日 (月)
- 開会時刻 13 時 00 分 閉会時刻 16 時 10 分
- 開催場所 管理棟評議会室(福井キャンパス), テレビ会議室 (小浜キャンパス)
- 出席者 菊澤 (議長), 田中, 服部, 日比, 神谷, 細谷, 瓦井, 片山, 津村
- 事務局 紙谷総括, 杉村主事

### 議事

#### 第 1 回議事録を確認

#### 【報告事項】

1. 授業評価
  - ・ 資料 1 に基づき, 実施状況と結果の集計方法を報告
2. 公開授業
  - ・ 資料 2 に基づき, 公開・参観者表を説明ののち, 問題点を整理
  - ・ 教室環境の改善をどう反映するか
  - ・ 報告書が少ない (ウェブ掲示板への書き込みなど便利な方法を構築すべきでは)
3. FD 研修
  - ・ 資料 3 に基づき, 前期の事業報告, 今後の開催方針, 今年度予算状況を説明

#### 【協議事項】

4. 授業評価
  - ・ 2/5-2/9 正式期間前の実施の条件 (実施が困難な場合という文語はゆるやかに)
  - ・ 教室環境の設問は, 別扱いにすべきではないか. 今年度はこのままにして, 19 年度に実現するために検討する.
  - ・ 学術教養センターから授業によっては無意味な設問を省けないか. この点は難しいので, 集計や公開の方法を考えることとした.
  - ・ 集計・分析方法を検討するため, FD 部員の授業評価結果を, 了解をとったうえで利用して方法を研究するとの提案を了承
5. 公開授業
  - ・ 後期も期間は同じく 2 週間とするが, それ以外でも公開できることを案内する.
  - ・ これまでの公開授業報告パンフレットをつくり, FD 部員から部局 (学科) に公開や参観を促す.
  - ・ ビデオ・オン・デマンドや Pot Cat のような新方式も検討していく.
6. FD 研修
  - ・ 学術教養センター, 経済学部で研修会を企画. 旅費が余るようなら FD フォーラムへの参加に使う.
7. 中期計画の平成 19 年度取組
  - ・ 授業評価, 公開授業, FD 学外研修を中心に実施. 授業評価については, 従来の方式と平行して, ケータイ利用など新方式も試行研究する.
8. 平成 19 年度予算



- ・ 授業評価は 18 年度と同じ 173 万円
- ・ 学外研修予算 25 万円 (FD フォーラム, NIME 研修など)
- ・ ケータイを利用した授業評価方式の試行 50 万円

注意 最後のケータイ事業は, 参加者が 10 名以上集まれば申請する. 8 月末までに菊沢まで連絡する

### ■ 第 3 回議事録

- 開催日 平成 18 年 12 月 21 日 (木)
- 開会時刻 9 時 00 分 閉会時刻 11 時 30 分
- 開催場所 管理棟評議会室 (福井キャンパス), テレビ会議室 (小浜キャンパス)
- 出席者 菊澤 (議長), 田中求之, 服部, 日び, 神谷, 細谷, 瓦井, 片山, 津村
- 事務局 松村課長, 紙谷総括主任, 杉村主事

#### 議 事

第 2 回議事録を確認, 了承

#### 【報告事項】

1. 平成 18 年度後期授業評価について
  - ・ 前期との違い (期間外実施 / WebCT / 自由記述欄の扱い)
  - ・ 12 月 15 日現在での実施予定状況
2. 平成 18 年度 FD 研修について
  - ・ 新任研修 1 件, ワークショップ 4 件, 学外研修 2 件をすでに実施
  - ・ 学術教養センターで現在学内 (or 学外) 研修を企画中
3. 平成 18 年度予算の執行状況
4. その他
  - ・ 19 年度以降大学院でも FD を実施することについて, その対応を議論した.

#### 【協議事項】

1. 18 年度後期授業公開の実施案
  - ・ 過去の実施状況の検討から, 公開する授業は現状かそれ以下が適当
  - ・ 参加者を増やすための方策の検討 (授業公開への参加のメリットの効果的な広報, 部局単位でのかなり絞った数の公開など) → 1 月初めまでに部局内から授業公開するものを募集する
2. 授業評価結果の分析
  - ・ 授業評価結果の分析 (部局ごと, 人数ごとの授業評価平均点の変化)
  - ・ 今後は結果の閲覧・分析について学内からのより広い合意を得る必要だが分析方法などには慎重であるべき (個別の事情にも十分な配慮)
3. 厳格な成績評価
  - ・ 大学改革実施計画書に基づき GPA の導入についての検討が必要
  - ・ GPA と厳格な成績評価についてのいくつかのポイント (評価の統一性・公平性: シラバスの目標の達成度で評価を行うことにより, 異なった科目間での評価に一貫性 / 授業についていけない学生の早期発見が可能: GPA=0 として換算するため / 同志社方式 (ド

ロップアウトを GPA=0 とする) だと、学生の科目履修率が高まる...など) →GPA について次回の FD 部会までに部局内での意見を収集する。

#### 4. 教員へのアンケートの実施

- ・ 2 月の学期末試験終了後に教員に対して、FD 事業に関するアンケートを実施予定 (メール or PDF による)

#### 【その他】

次回部会は、3 月 5 日～9 日を目処に日程調整のうえ実施する。議題として、年度報告の分担等を予定。

### ■ 第 4 回議事録

- 開催日 平成 19 年 3 月 9 日 (金)
- 開会時刻 9 時 00 分 閉会時刻 12 時 00 分
- 開催場所 管理棟評議会室 (福井キャンパス), テレビ会議室 (小浜キャンパス)
- 出席者 菊澤 (議長), 田中, 服部, 日び, 神谷, 片山, 津村, 松村
- 欠席者 細谷, 瓦井
- 事務局 紙谷総括主任, 杉村主事 (小浜キャンパス)

#### 議 事

##### 1. 事業報告

###### (1) 授業評価, 公開授業, 研修の各事業について

- ・ 分析を含めた報告があり, この会議後半の意見交換につなげることができた。

###### (2) 授業評価結果についてのコメント

- ・ 提出期限は 3 月 20 日としウェブに掲載。学内はメール, 非常勤は郵便で処理する。コメントの追加要請は, 4 月中旬に行い, 問題が発生した場合は部会長が処理する。

###### (3) 本年度の決算報告

- ・ 消耗品の執行がなかったが, これは研修時のテキスト代が必要なかったことによる。

##### 2. 2007 年度 FD 部会報告書の作成について

###### (1) 報告書の構成と内容

- ・ 2006 年度の事業報告と, 今後の FD 活動への提言の 2 部構成とする。
- ・ 章立ては, 授業評価, 公開, 研修の事業別とし, 細目は, 執筆者に任せる。ただし, 前期と後期にわけるこれまで形態はできるだけとらないようにする。

###### (2) 執筆分担

- ・ FD 部会 (菊澤, 事務局), 授業評価 (日びほか), 授業公開 (津村ほか), 研修 (片山ほか) 調査研究 (田中), 全体編集 (菊澤, 片山), 印刷手配 (事務局) とするが, ML を通して委員全員が協力する。

###### (3) 作成日程と配布方法

- ・ 3 月 20 日締切り, その後編集, ML での確認を経て 3 月 31 日完成とする。
- ・ 原稿締切りの時点でページ数を確定し, 経理処理する。
- ・ 300 部 (専任教員・非常勤合わせて 250, 研修講師, 次年度の新任研修等 20, 予備 30)

### 3. 2年間のFD部会の活動を振り返っての意見交換

#### (1) 授業評価

- ・ マンネリ化しつつあるが、個々の意識改革のためにも継続することが重要
- ・ 結果について平均だけでなく標準偏差を算出することに意義あり
- ・ 経年変化を見るかぎり、実態はともかく改善の方向が見られる。ただ悪い評価を受けても実際に改善されていないという学生の声も
- ・ 設問用紙・解答用紙ともに大量の残部がある
- ・ 学期末だけではなく、途中での評価が受講学生にとっては本来必要。中間調査はそもそも性質が異なる：速度・難易度・板書など方法論中心。できるだけ簡易な方式が理想：紙・WebCTの活用、携帯電話の活用
- ・ 「ゆとり教育」世代入学に際して、学生の二極分解への対処、上を伸ばすか？下を救う？大学の方針は？

#### (2) 授業公開

- ・ 経済学部での関心の薄れは大学への当事者意識の薄れの反映。法人化関連の議論につかれ、授業改善どころではなかった
- ・ 一部の教員の善意・やる気だけに頼るやり方には限界。なんらかの表彰制度の設置：Best Teacher 賞など。公開のみならず参観も評価対象にする。
- ・ 部局内で積極的に参加を呼び掛ける必要がある。同時に他部局の授業公開の参観でも学ぶところは大きい。

#### (3) FD研修

- ・ 研修のテーマが教員の問題関心に沿うものであれば参加者が見られるこういった問題に関心があるのか、公的・非公的に吸収できればよい。
- ・ 部局間または職員と教員との間でのコンセンサス形成の重要性。複数の部局にまたがる問題や職員と教員が共に取り組むべき問題の認識が重要。

#### (4) FD部会はどうあるべきか

- ・ 問題を抱えた教員へのサポート・フォローをより積極的に取り組む必要がある。
- ・ FD活動にはどういった学生を育てたいのかについての共通認識が不可欠。
- ・ 来年度以降体制が変わるが、FD部会にはもう少し権限も必要だが単純にトップダウン的なFD事業ではうまくいかずむしろ反発を招く。
- ・ ボトムアップを基本とするが、FD部会が全学的視点で共通の問題認識と課題をシーズとして提供することも(とりわけ、ゆとり教育をうけた学生が入学する時代には)必要。
- ・ 大学全体がFD活動への関心を高め、教員同士の問題共有が必要。たとえば外部のFDフォーラムへの参加で他大学の活動に接するのは重要。

#### 1.1.4 経理資料

2005年度の経理の大項目経費と、細目を表にしておく。これは、昨年度とほぼ同額である。なお、経理には報告書印刷代が計上できない仕組みになっている。しかし、FDサイトによる報告書掲載やメーリングリストによる配布は、FD活動の普及・浸透が不十分な現在では効果が期待できないと考え、昨年に続き、今年度も工夫して作成し、学内、非常勤の全教員、新任教員、および研修講師に配布した。また、昨年度の報告書はJABEEの審査の際にも有効であったとのことである。

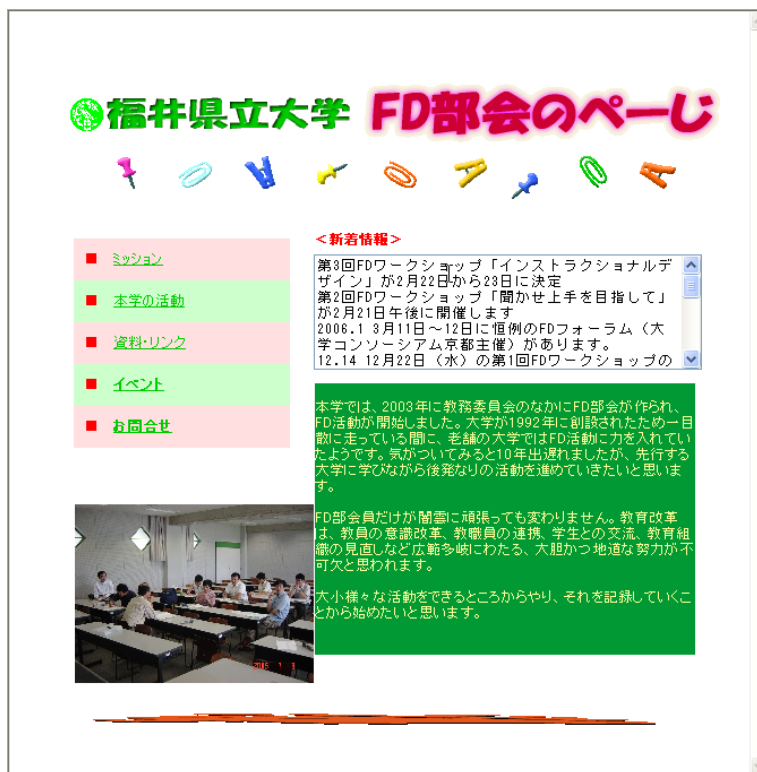
#### 2006年度FD事業経費

費目	項目	細目	実績
報償費			355,000
	研修講師	メディア教育開発センター（小浜C）	
	研修講師	話し方研究所（小浜C）	
	研修講師	メディア教育開発センター（福井C）	
	研修講師	茨城県立医療大学（福井C）	
	研修講師	玉川大学コア・FYE教育センター（福井C）	
旅費			322,050
	招聘	メディア教育開発センター（千葉）	
	招聘	メディア教育開発センター（千葉）	
	招聘	話し方研究所（東京）	
	招聘	玉川大学（千葉）	
	派遣	平成18年度看護学教育ワークショップ（千葉）	
	派遣	第4回FDシンポジウム（東京）	
印刷製本		FD報告書2006	
委託料			1,613,850
		前期授業評価の調査票作成と回答集計処理	
		後期授業評価の調査票作成と回答集計処理	
使用料			25,580
	タクシー代	メディア教育開発センター（小浜C）	
	タクシー代	メディア教育開発センター（福井C）	
	タクシー代	話し方研究所（小浜C）	
	タクシー代	玉川大学（福井C）	
計			2,316,480

## 1.2 FD部会

FD部会では、活動状況の速報と情報の蓄積を目的として、2005年7月より、FD部会のホームページ（以下、FDサイトという）を運営している。本学ウェブ・サイトのトップページの「大学の取組み」から「ファカルティ・ディベロップメント」を経て入ることができる。以下に、FDサイトのトップページ及びサイトマップを示す。この中で、授業評価の結果などは、学内の専用サイトに置いたので学外者には見えない。サイトには、最新のイベントの案内、授業公開報告や研修報告などを迅速にアップしている。ご利用戴きたい。

昨年より情報センター1階閲覧室の入口右側の棚に、FD資料コーナー（写真、科学研究費関連資料の右側）を設けている。ご利用願うとともに、FD関連資料等があれば、ご提供下さい。



## 2. 授業評価

### 2.1 指 針

#### 2.1.1 前期アンケート指針

授業評価アンケートの設問設定については、今後の経年変化に関する解析に配慮し前期、後期とも内容は基本的には2005年度のものを踏襲した。ただし、前期については次の通り一部の項目を削除し、簡素化した。

(1) 標題から実施年度と期を削除。

アンケート用紙は使い続けられることから無駄が出にくくなることと、オムニバスや短期開講の科目についても任意の期間にアンケートが実施できるようにすることが目的である。

(2) 旧 Q18（実験・実習・ゼミ受講生用の設問）を削除。

実験／実習／ゼミなどの区別が厳密でないことや、H17年後期の結果にも大きな問題点があるように思われないことなどから、全体の問題数を減らして受講者の負担を軽減するため削除した。

(3) 旧 Q21-Q23（オフィスアワー関連の設問）

この設問は当該授業について問いかけたものではなくて、オフィスアワーの周知を念頭に置いた設問である。そのため、授業全般を対象とした設問であり、授業評価アンケートの項目としてはそぐわないと思われた。オフィスアワーの普及についてはガイダンスなど他の方法によるのが適切だと思われた。

授業評価アンケートの実施にあたり、WebCT等学習支援システムの利用を既に認めてきたが、その実施方法については周知が不十分であった。そこで、WebCTの利用に関しては、アンケート設問のテンプレートを利用して実施可能なことを、実施案内に明記した。集計に関しては実施した教員がCSV形式のテキストファイルとして提出することとした。

授業評価アンケートに対する回答の解析方法については、平均値の開示だけでは不十分との指摘があったことから、標準偏差も開示することとした。

#### 2.1.2 後期アンケート指針

授業評価アンケートの設問設定については、「Q14 講義はシラバスに沿って計画的に行われましたか？」という設問に対して計画的にという言葉が授業のスタイルにそぐわない場合があるとの意見に配慮し、Q13, Q14 中の表現を次のとおり一部修正した。

Q13. シラバスに含まれる情報は授業を受ける上で役立ちましたか？

Q14. 授業はシラバスの内容に則したものでしたか？

授業評価アンケートの実施方法については、授業評価実施時期の期間外実施を試験運用することにした。これは、従来期末試験前の2週間程度であった実施期間のみに限らず実施することを可能にしたものであり、本年度後期は11月21日より運用を開始した。結果としてオムニバス授業の複数の教官による実施も可能になった。

## 2.2 授業評価アンケート

### 2.2.1 方法と結果

#### (1) 前期

- ・実施期間

原則，補講期間 1 週間前の次の期間

平成18年7月18日（火）～7月24日（火）

上記期間に実施が困難な場合

平成18年7月10日（月）～7月14日（金）

- ・対象者：全教員（非常勤講師も含む）

- ・対象科目：原則として全ての講義科目（演習，オムニバスも含む）

- ・調査票回収状況

経済学部 1,843枚

生物資源学部 1,339枚

看護福祉学部 1,362枚

学術教養センター・情報センター 3,825枚

計 8,369枚

- ・参加教員：167人が参加（非常勤講師含む）

- ・結果等の公開：以下の項目について学内 LAN 内のウェブページ

<http://w3inside.fpu.ac.jp/kyomu/H18/zenki/hyoka-top.html> にて公開した

1) 全体集計結果：平均と標準偏差

2) 個別集計結果（同意の得られた先生のみ）

3) 結果（自由記述欄の記載内容を含む）を受けての教員の感想・コメント

- ・担当教員の評価結果の開示内容：

1) 全体集計結果

2) 担当授業の質問後との平均点

3) 自由記述（ファイルとして送付した）

#### (2) 後期

- ・実施期間

原則，補講期間 2 週間前の次の期間

平成 19 年 1 月 26 日（金）～2 月 8 日（木）

上記以外に実施

平成 19 年 11 月 21 日（火）～1 月 10 日（水）

- ・調査票回収状況

経済学部 1,602 枚

生物資源学部 1,342 枚

看護福祉学部 1,633 枚

学術教養センター・情報センター 3,278 枚

計 7,855 枚

- ・参加教員

経済学部 29 名

生物資源学部 31 名

看護福祉学部 29 名

学術教養センター・情報センター 28名

非常勤講師 40名

計 157名（授業評価調査票）

- ・結果等の公開：以下の項目について学内 LAN 内のウェブページ  
(<http://w3inside.fpu.ac.jp/kyomu/H18/koki/hyoka-top.html>) にて公開した
  - 1)全体集計結果：平均と標準偏差
  - 2)個別集計結果（同意の得られた教員のみ）
  - 3)結果（自由記述欄の記載内容を含む）を受けての教員の感想・コメント
- ・担当教員の評価結果の開示内容：
  - 1)全体集計結果
  - 2)担当授業の質問後との平均点
  - 3)自由記述（ファイルとして送付した）

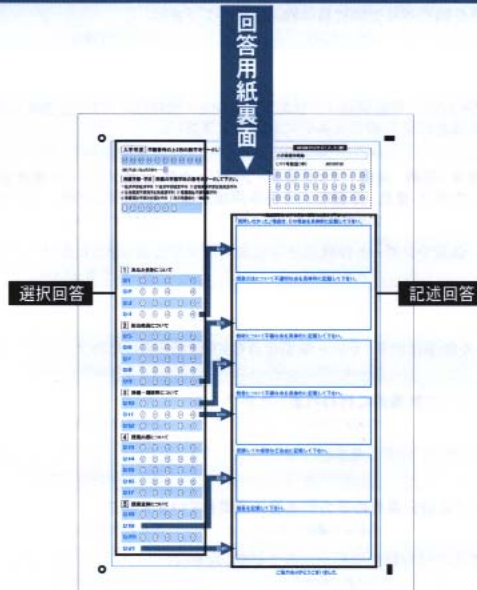


# 福井県立大学 授業に関する調査

## 質問用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために  
行うものです。あなたが現在受講しているこの授業について、調査ご協力下さい。

**回答は、別紙回答用紙に記入して下さい。**



あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも  
近いものの番号をマーク、記述して下さい。

ただし、Q1からQ20(Q19を除く)について、選択肢①～④  
の中に適切な回答がどうしても見当たらない場合は、⑤を  
マークして下さい。

2006 年前期調査票（裏頁）

**1 あなた自身について**

**Q1** この授業に毎回出席しましたか？  
 ① 半分以上出席しなかった ② 6-8割程度出席した ③ ほとんど毎回出席した

**Q2** この授業の目標や目的(シラバスに記載)についてどの程度知っていましたか？  
 ① 知らなかった ② 漠然と知っていた ③ 明確に知っていた

**Q3** この授業(課題・レポートを含む)に意欲的に取り組みましたか？  
 ① 意欲的ではなかった ② あまり意欲的に取り組まなかった ③ ある程度意欲的に取り組んだ ④ 意欲的に取り組んだ

**Q4** この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか？  
 質問しなかった場合は、その理由を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。  
 ① 内容が理解できないので質問しなかった ② 聞きたいことはあったが質問しなかった ③ よく理解できたので質問しなかった ④ 質問したことがある

**2 担当教員について**

**Q5** 授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？  
 ① 感じなかった ② あまり感じなかった ③ ある程度感じた ④ 感じた

**Q6** 質問しやすい雰囲気でしたか？  
 ① しやすい雰囲気ではなかった ② あまりししやすい雰囲気ではなかった ③ ある程度ししやすい雰囲気だった ④ しやすい雰囲気だった

**Q7** 授業中の学生に対する態度は公平でしたか？  
 ① 不公平 ② やや不公平 ③ まずまず公平 ④ 公平

**Q8** 先生の時間の使い方や授業の速度はどうでしたか？  
 ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

**Q9** 先生の授業の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、WebCTの活用など)はどうでしたか？  
 また、不適切な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。  
 ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

**3 設備・環境等について**

**Q10** 教材(教科書・配布資料・実習要綱・オリエンテーション資料など)は役立ちましたか？  
 また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。  
 ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

**Q11** 教室の環境や設備等(照明・空調・マイク音声・プロジェクター・パソコン・実験実習用機器類の調子など)に不備はありましたか？ また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。  
 ① 不備が多かった ② 不備がある程度あった ③ まずまずの環境だった ④ 快適な環境だった

**Q12** この授業の予習・復習やレポート作成に必要な資料は大学にありましたか？  
 ① 無かった ② あまり無かった ③ まずまず揃っていた ④ 揃っていた

**4 授業内容について**

**Q13** シラバスに含まれる情報は授業(予習・復習を含む)で役立ちましたか？  
 ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

**Q14** 講義はシラバスに沿って計画的に行われましたか？  
 ① 計画的ではなかった ② あまり計画的ではなかった ③ ある程度計画的だった ④ 計画的だった

**Q15** 授業中の内容はどの程度理解できましたか？  
 ① 理解できなかった ② あまり理解できなかった ③ ある程度理解できた ④ 理解できた

**Q16** この授業内容に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？  
 ① 満足できなかった ② あまり満足できなかった ③ ある程度満足できた ④ 満足できた

**Q17** この授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？  
 ① 高まらなかった ② あまり高まらなかった ③ 少し高まった ④ 高まった

**5 授業全体について**

**Q18** この授業を総合的に評価して下さい。  
 ① 良くない ② あまり良くない ③ まずまず良い ④ 良い

**Q19** 受講しての感想など自由に書いて下さい。

**Q20** 教員設定の質問(別紙参照)  
 ① ② ③ ④

**Q21** 教員設定の質問(別紙参照)

ご協力ありがとうございました



# 福井県立大学 授業に関する調査

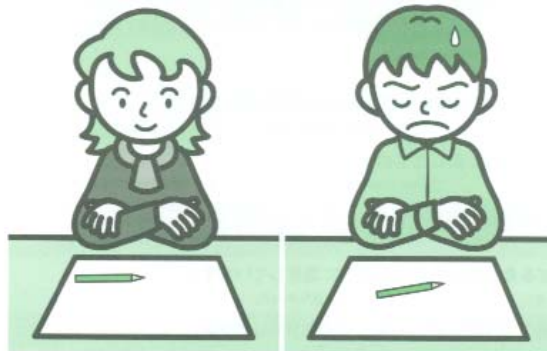
## 質問用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

**回答は、別紙回答用紙に記入して下さい。**

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述して下さい。

ただし、Q1からQ18について、選択肢の中に適切な回答がどうしても見当たらない場合は、①をマークして下さい。



本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で今学期末に開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.s.fpu.ac.jp/fd/fpuinfo.html> をご覧下さい。

2006 年後期調査票（裏頁）

1 あなた自身について

Q1 この授業に毎回出席しましたか？

- ① 半分以上出席しなかった ② 0-8割程度出席した ③ ほとんど毎回出席した

Q2 この授業の目標や目的(シラバスに記載)についてどの程度知っていましたか？

- ① 知らなかった ② 漠然と知っていた ③ 明確に知っていた

Q3 この授業(課題・レポートを含む)に意欲的に取り組みましたか？

- ① 意欲的ではなかった ② あまり意欲的に取り組まなかった ③ ある程度意欲的に取り組んだ ④ 意欲的に取り組んだ

Q4 この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか？

質問しなかった場合は、その理由を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 内容が理解できないので質問しなかった ② 聞きたいことはあったが質問しなかった ③ よく理解できたので質問しなかった ④ 質問したことがある

2 担当教員について

Q5 授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？

- ① 感じなかった ② あまり感じなかった ③ ある程度感じた ④ 感じた

Q6 質問しやすい雰囲気でしたか？

- ① しやすい雰囲気ではなかった ② あまりしやすい雰囲気ではなかった ③ ある程度しやすい雰囲気だった ④ しやすい雰囲気だった

Q7 授業中の学生に対する態度は公平でしたか？

- ① 不公平 ② やや不公平 ③ まずまず公平 ④ 公平

Q8 先生の時間の使い方や授業の速度はどうでしたか？

- ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

Q9 先生の授業の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム[WebCT等]の活用など)はどうでしたか？また、不適切な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

3 設備・環境等について

Q10 教材(教科書・配布資料・実習要綱・オリエンテーション資料など)は役立ちましたか？

また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

Q11 教室の環境や設備等(照明・空調・マイク音声・プロジェクター・パソコン・実験実習用機器類の調子など)に不備はありましたか？また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 不備が多かった ② 不備がある程度あった ③ まずまずの環境だった ④ 快適な環境だった

Q12 この授業の予習・復習やレポート作成に必要な資料は大学にありましたか？

- ① 無かった ② あまり無かった ③ まずまず揃っていた ④ 揃っていた

4 授業内容について

Q13 シラバスに含まれる情報は授業を受ける上で役立ちましたか？

- ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

Q14 授業はシラバスの内容に則したものでしたか？

- ① 則していなかった ② あまり則していなかった ③ ある程度則していた ④ 則していた

Q15 授業中の内容はどの程度理解できましたか？

- ① 理解できなかった ② あまり理解できなかった ③ ある程度理解できた ④ 理解できた

Q16 この授業に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？

- ① 満足できなかった ② あまり満足できなかった ③ ある程度満足できた ④ 満足できた

Q17 この授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？

- ① 高まらなかった ② あまり高まらなかった ③ 少し高まった ④ 高まった

5 授業全体について

Q18 この授業を総合的に評価して下さい。

- ① 良くない ② あまり良くない ③ まずまず良い ④ 良い

Q19 授業を受けた上での感想など自由に書いて下さい。

Q20 教員設定の質問(別紙参照)

- ① ② ③ ④

Q21 教員設定の質問(別紙参照)

ご協力ありがとうございました

# 福井県立大学 授業に関する調査

## 回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受講しているこの授業について、調査ご協力下さい。

# 回答は、裏面に記入して下さい。

別紙質問用紙の問に対して、  
選択回答の場合は、マークシート記入を、  
選択回答の場合は、右側空欄に記述を、  
して下さい。

### 記入上の注意

- 1：記入は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用して下さい。
- 2：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消して下さい。
- 3：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないで下さい。

マーク例) 良い例 (02) ... ▶ ● 悪い例 (02) ... ▶ ~~(02)~~ ~~(02)~~ ~~(02)~~

**入学年度** 学籍番号の上2桁の数字をマークして下さい。

07 08 09 10 11 12 13 14 15 16

(例) 平成17年4月入学生... 16

**所属学部・学科** 所属の学部学科の番号をマークして下さい。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科  
 4: 生物資源学部海洋生物資源学科 5: 看護福祉学部看護学科  
 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

破線内は記入不要

情報処理 A  
 第 1 情報処理演習室 A0552901

● 1 2 3 4 5 6 7 8 9  
 0 1 2 ● 4 5 6 7 8 9  
 0 1 2 3 4 ● 6 7 8 9

※記述回答は、文字を青色の矩形内に収めて下さい。

**1 あなた自身について**

01 1 2 3 0

02 1 2 3 0

03 1 2 3 1 0

04 1 2 3 4 0

**2 担当教員について**

05 1 2 3 1 0

06 1 2 3 1 0

07 1 2 3 1 0

08 1 2 3 1 0

09 1 2 3 1 0

**3 設備・環境等について**

010 1 2 3 1 0

011 1 2 3 1 0

012 1 2 3 1 0

**4 授業内容について**

013 1 2 3 1 0

014 1 2 3 1 0

015 1 2 3 1 0

016 1 2 3 1 0

017 1 2 3 1 0

**5 授業全体について**

018 1 2 3 1 0

019

020 1 2 3 1 0

021

04

「質問しなかった」場合は、その理由を具体的に記載して下さい。

授業方法について不適切な点を具体的に記載して下さい。

09

教材について不備な点を具体的に記載して下さい。

010

教室について不備な点を具体的に記載して下さい。

011

受講しての感想など自由に記載して下さい。

019

回答を記載して下さい。

021

ご協力ありがとうございました

- 17 -



# 福井県立大学 授業に関する調査

## 回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

# 回答は、裏面に記入して下さい。

別紙質問用紙の問に対して、  
選択回答の場合は、マークシート記入を、  
選択回答の場合は、右側空欄に記述を、  
して下さい。

### 記入上の注意

- 1：記入は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用して下さい。
- 2：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消して下さい。
- 3：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないで下さい。

マーク例) 良い例 (02) ... ▶ ● 悪い例 (02) ... ▶ ~~●~~ ~~○~~ ~~○~~ ~~○~~

2006 年後期回答用紙（裏頁）

入学年度 学籍番号の上2桁の数字をマークして下さい。 ※記述回答は、文字を青色の矩形内に収めて下さい。

07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17

(例) 平成17年4月入学生... 16

所属学部・学科 所属の学部学科の番号をマークして下さい。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科  
 4: 生物資源学部海洋生物資源学科 5: 看護福祉学部看護学科  
 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

04

「質問しなかった」場合は、その理由を具体的に記載して下さい。

1 あなた自身について

01 1 2 3 4  
 02 1 2 3 4  
 03 1 2 3 4 5  
 04 1 2 3 4 5

09

授業方法について不適切な点を具体的に記載して下さい。

2 担当教員について

05 1 2 3 4 5  
 06 1 2 3 4 5  
 07 1 2 3 4 5  
 08 1 2 3 4 5  
 09 1 2 3 4 5

010

教材について不備な点を具体的に記載して下さい。

3 設備・環境等について

010 1 2 3 4 5  
 011 1 2 3 4 5  
 012 1 2 3 4 5

011

教室について不備な点を具体的に記載して下さい。

4 授業内容について

013 1 2 3 4 5  
 014 1 2 3 4 5  
 015 1 2 3 4 5  
 016 1 2 3 4 5  
 017 1 2 3 4 5

019

授業を受けた上での感想など自由に記載して下さい。

5 授業全体について

018 1 2 3 4 5  
 019  
 020 1 2 3 4  
 021

021

021

回答を記載して下さい。

ご協力ありがとうございました



### (3)前期の結果

#### ・実施期間

原則，補講期間1週間前の次の期間

平成18年7月18日（火）～7月24日（火）

上記期間に実施が困難な場合

平成18年7月10日（月）～7月14日（金）

#### ・調査票回収状況

経済学部	1,843枚
生物資源学部	1,339枚
看護福祉学部	1,362枚
学術教養センター・情報センター	3,825枚
計	8,369枚

#### ・参加教員

経済学部	34名（94.4%）
生物資源学部	29名（90.6%）
看護福祉学部	33名（91.7%）
学術教養センター・情報センター	27名（100%）
非常勤講師	44名（83.1%）
計	167名

### (4)後期の結果

#### ・実施期間

原則，補講期間2週間前の次の期間

平成19年1月26日（金）～2月8日（木）

上記以外に実施

平成18年11月21日（火）～1月10日（水）

#### ・調査票回収状況

経済学部	1,602枚
生物資源学部	1,342枚
看護福祉学部	1,633枚
学術教養センター・情報センター	3,278枚
計	7,855枚

・参加教員

経済学部	29名 (87.9%)
生物資源学部	31名 (86.1%)
看護福祉学部	29名 (87.9%)
学術教養センター・情報センター	28名 (100%)
非常勤講師	40名 (100%)
<hr/>	
計	157名

全体集計結果 (前期)

集計グループ(集計数)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	
全体 (8369)	2.76	2.20	3.06	2.90	3.25	3.00	3.48	3.22	3.20	3.19	3.22	3.06	2.89	3.19	3.04	2.92	3.12	3.26	
学部学別 (8369)	0.62	0.61	0.86	1.0	0.74	0.94	0.80	0.75	0.84	0.78	0.80	0.80	0.80	0.62	0.81	0.80	0.86	0.78	
学部学別 (8369)																			
経済学部 (3973)	2.68	2.18	2.98	2.75	3.17	2.86	3.43	3.15	3.12	3.09	3.15	2.95	2.82	3.10	2.94	2.81	3.02	3.19	
経済学部 (2039)	0.56	0.59	0.75	0.96	0.72	0.90	0.65	0.70	0.74	0.73	0.68	0.75	0.75	0.60	0.72	0.76	0.77	0.72	
経済学部 (1934)	2.69	2.21	2.96	2.72	3.21	2.82	3.43	3.17	3.14	3.09	3.15	2.97	2.83	3.09	2.94	2.82	3.02	3.19	
経済学部 (2156)	0.66	0.58	0.76	0.94	0.70	0.91	0.66	0.69	0.76	0.72	0.68	0.72	0.74	0.61	0.72	0.76	0.77	0.71	
生物資源学部 (1005)	2.68	2.15	2.98	2.77	3.14	2.90	3.42	3.13	3.10	3.08	3.15	2.93	2.80	3.12	2.94	2.80	3.02	3.20	
生物資源学部 (2218)	0.55	0.60	0.75	0.98	0.74	0.88	0.65	0.71	0.73	0.69	0.67	0.76	0.76	0.60	0.73	0.77	0.77	0.73	
生物資源学部 (1165)	2.80	2.21	3.06	2.97	3.27	3.02	3.48	3.23	3.22	3.23	3.26	3.09	2.88	3.23	3.07	2.95	3.12	3.25	
看護学部 (1053)	0.41	0.61	0.71	0.92	0.67	0.82	0.63	0.70	0.73	0.69	0.65	0.73	0.79	0.62	0.68	0.73	0.75	0.70	
看護学部 (1165)	2.63	2.24	3.05	2.96	3.32	3.08	3.56	3.33	3.26	3.29	3.33	3.19	2.93	3.26	3.12	3.01	3.17	3.32	
看護学部 (1053)	0.39	0.58	0.68	0.88	0.64	0.82	0.58	0.63	0.70	0.64	0.60	0.64	0.77	0.59	0.66	0.71	0.77	0.66	
看護学部 (1165)	2.78	2.18	3.07	2.98	3.22	3.04	3.40	3.15	3.18	3.18	3.21	3.01	2.84	3.21	3.02	2.89	3.06	3.20	
看護学部 (1053)	0.42	0.63	0.73	0.95	0.69	0.82	0.66	0.75	0.74	0.72	0.69	0.78	0.81	0.64	0.69	0.75	0.76	0.73	
看護学部 (1165)	2.83	2.23	3.21	3.10	3.38	3.18	3.57	3.33	3.33	3.32	3.31	3.20	3.04	3.28	3.19	3.09	3.31	3.39	
看護学部 (1053)	0.41	0.59	0.66	0.86	0.66	0.82	0.60	0.68	0.67	0.64	0.62	0.63	0.70	0.58	0.66	0.70	0.71	0.67	
看護学部 (1165)	2.84	2.21	3.17	3.01	3.36	3.14	3.54	3.32	3.31	3.29	3.33	3.19	2.99	3.28	3.18	3.09	3.28	3.38	
看護学部 (1053)	0.40	0.60	0.66	0.89	0.66	0.84	0.62	0.69	0.71	0.64	0.63	0.63	0.73	0.59	0.66	0.69	0.70	0.68	
看護学部 (1165)	2.82	2.24	3.25	3.19	3.40	3.22	3.59	3.34	3.36	3.36	3.29	3.22	3.09	3.28	3.20	3.09	3.34	3.40	
看護学部 (1053)	0.43	0.59	0.66	0.83	0.66	0.79	0.58	0.67	0.63	0.61	0.60	0.62	0.65	0.57	0.65	0.72	0.71	0.66	
看護学部 (1165)	3.00	2.91	3.32	2.91	3.82	3.09	3.95	3.68	3.73	3.59	3.36	3.18	3.45	3.64	3.18	3.14	3.27	3.86	
看護学部 (1053)	0.00	0.29	0.47	0.79	0.39	0.60	0.21	0.47	0.45	0.49	0.48	0.39	0.50	0.48	0.57	0.55	0.45	0.34	
看護学部 (1165)	3.00	3.00	3.67	3.00	3.33	3.33	3.33	3.00	3.33	3.00	3.33	3.00	3.00	3.00	3.33	3.33	3.67	3.67	
看護学部 (1053)	0.00	0.00	0.47	0.00	0.47	0.47	0.47	0.00	0.47	0.00	0.47	0.00	0.00	0.00	0.47	0.47	0.47	0.47	
看護学部 (1165)	2.00	2.50	3.50	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.50	4.00	3.50	3.00	3.50	4.00	4.00	4.00	4.00	
看護学部 (1053)	1.0	0.50	0.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.50	0.00	0.50	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00	0.00	
看護学部 (1165)	2.33	2.00	3.00	3.00	3.67	4.00	3.67	3.33	3.67	3.67	4.00	3.67	3.33	3.33	3.67	3.33	3.00	3.00	
看護学部 (1053)	0.47	0.00	0.82	0.00	0.47	0.00	0.47	0.00	0.47	0.47	0.00	0.47	0.00	0.47	0.47	0.47	0.82	0.00	
看護学部 (1165)	2.75	2.39	3.06	3.00	3.00	3.28	3.33	3.33	3.41	3.22	3.67	3.33	3.06	3.65	3.22	3.29	3.17	3.25	
看護学部 (1053)	0.43	0.49	0.78	0.84	0.88	0.87	0.58	0.75	0.49	0.63	0.47	0.67	0.70	0.48	0.71	0.57	0.76	0.56	
看護学部 (1165)	2.32	2.39	2.96	3.05	3.21	2.88	3.76	3.26	3.11	3.39	3.42	2.90	3.04	3.26	3.08	2.80	3.08	3.52	
看護学部 (1053)	0.71	0.56	0.90	0.83	0.72	0.97	0.50	0.75	0.79	0.57	0.49	0.77	0.84	0.53	0.76	0.80	0.78	0.63	
看護学部 (1165)	2.46	2.39	3.23	3.20	3.43	3.28	3.57	3.37	3.42	3.41	3.45	3.16	2.91	3.19	3.22	3.04	3.39	3.52	
看護学部 (1053)	0.62	0.57	0.71	0.90	0.70	0.77	0.59	0.65	0.67	0.73	0.64	0.75	0.92	0.68	0.64	0.69	0.72	0.63	
看護学部 (1165)	2.80	2.25	3.03	2.96	3.33	3.04	3.49	3.25	3.25	3.26	3.24	3.05	2.97	3.21	3.12	2.98	3.20	3.32	
看護学部 (1053)	0.44	0.58	0.68	0.85	0.65	0.83	0.61	0.68	0.69	0.66	0.63	0.69	0.72	0.59	0.64	0.71	0.70	0.66	
看護学部 (1165)	2.88	2.19	2.98	2.85	3.21	3.01	3.45	3.20	3.16	3.15	3.20	3.05	2.89	3.18	3.01	2.90	3.08	3.21	
看護学部 (1053)	0.56	0.61	0.76	0.93	0.70	0.85	0.65	0.70	0.72	0.69	0.64	0.71	0.73	0.60	0.71	0.75	0.77	0.73	
看護学部 (1165)	2.82	2.17	3.13	2.87	3.23	2.93	3.50	3.21	3.19	3.16	3.21	3.05	2.85	3.18	3.01	2.89	3.09	3.25	
看護学部 (1053)	0.42	0.60	0.71	0.98	0.71	0.91	0.65	0.71	0.74	0.73	0.69	0.75	0.77	0.62	0.73	0.77	0.77	0.72	
看護学部 (1165)	2.64	2.17	2.93	2.67	3.17	2.77	3.45	3.15	3.11	3.11	3.13	2.94	2.81	3.10	2.91	2.76	3.01	3.20	
看護学部 (1053)	0.58	0.56	0.73	0.96	0.72	0.92	0.65	0.71	0.73	0.72	0.68	0.71	0.74	0.58	0.70	0.76	0.77	0.71	
看護学部 (1165)	2.82	2.23	3.03	2.99	3.23	3.10	3.44	3.19	3.18	3.25	3.25	3.10	2.88	3.25	3.02	2.80	3.11	3.23	
看護学部 (1053)	0.39	0.61	0.70	0.91	0.65	0.78	0.62	0.72	0.71	0.65	0.61	0.69	0.77	0.60	0.67	0.74	0.73	0.69	
看護学部 (1165)	2.88	2.25	3.23	3.15	3.45	3.28	3.61	3.38	3.39	3.39	3.34	3.24	3.10	3.32	3.25	3.14	3.43	3.47	
看護学部 (1053)	0.34	0.59	0.62	0.82	0.62	0.75	0.56	0.64	0.64	0.57	0.59	0.56	0.66	0.55	0.61	0.62	0.63	0.62	
看護学部 (1165)	2.74	2.19	3.08	2.88	3.23	2.97	3.46	3.22	3.21	3.13	3.21	3.02	2.87	3.16	3.03	2.82	3.07	3.23	
看護学部 (1053)	0.51	0.61	0.75	0.95	0.71	0.88	0.66	0.70	0.74	0.73	0.68	0.78	0.77	0.63	0.73	0.75	0.77	0.73	
看護学部 (1165)	2.69	2.14	2.95	2.68	3.19	2.79	3.48	3.19	3.12	3.12	3.16	3.01	2.84	3.15	2.93	2.82	3.04	3.19	
看護学部 (1053)	0.56	0.59	0.76	0.97	0.72	0.92	0.63	0.70	0.72	0.72	0.69	0.71	0.75	0.61	0.74	0.78	0.79	0.74	
看護学部 (1165)	2.82	2.26	3.17	3.11	3.31	3.20	3.48	3.25	3.29	3.26	3.23	3.10	2.94	3.22	3.15	3.02	3.21	3.34	
看護学部 (1053)	0.40	0.59	0.67	0.85	0.66	0.76	0.64	0.69	0.66	0.68	0.62	0.74	0.76	0.60	0.65	0.70	0.71	0.67	

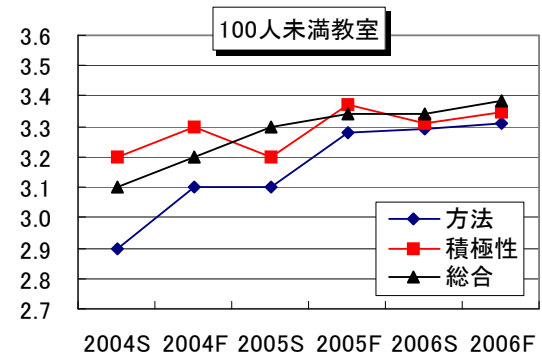
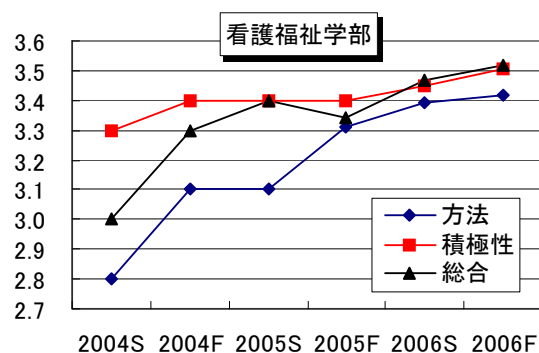
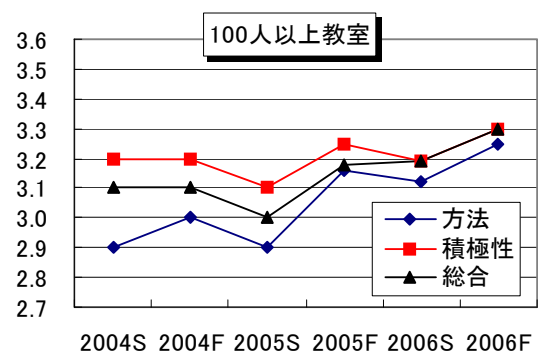
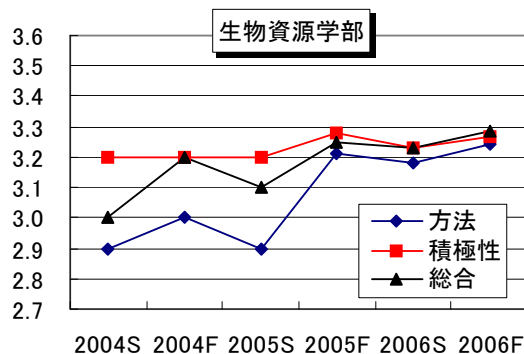
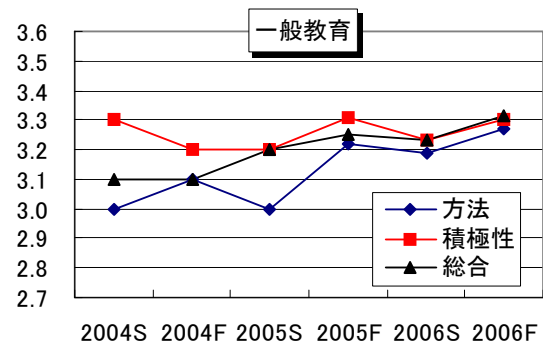
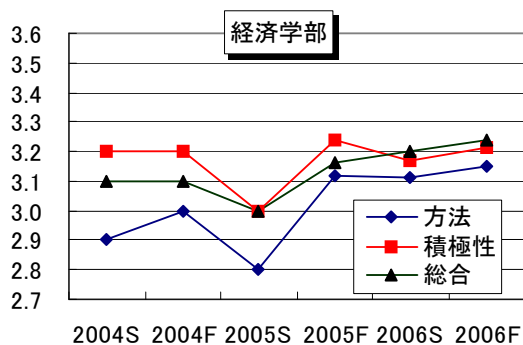
全体集計結果 (後期)

集計グループ(集計数)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体 (7855)	2.75	2.32	3.12	2.96	3.32	3.09	3.49	3.27	3.27	3.24	3.25	3.12	3.02	3.24	3.11	3.02	3.20	3.34
学部学科別 (7855)	0.49	0.59	0.68	0.87	0.64	0.79	0.61	0.67	0.67	0.65	0.63	0.65	0.70	0.57	0.67	0.72	0.71	0.65
学部学科別 (7855)	2.66	2.27	3.01	2.79	3.23	2.97	3.43	3.19	3.18	3.14	3.17	3.01	2.94	3.17	3.00	2.88	3.10	3.26
経済学部 (3371)	0.55	0.58	0.70	0.90	0.66	0.81	0.62	0.66	0.68	0.68	0.64	0.65	0.67	0.56	0.66	0.73	0.71	0.66
経済学科 (1756)	2.71	2.29	3.02	2.76	3.25	2.87	3.44	3.19	3.20	3.14	3.17	3.03	2.95	3.15	2.88	2.88	3.11	3.25
経営学科 (1613)	0.52	0.59	0.68	0.90	0.63	0.81	0.60	0.65	0.66	0.66	0.66	0.61	0.66	0.56	0.65	0.72	0.69	0.66
経営学部 (2068)	2.61	2.25	3.00	2.83	3.21	2.96	3.41	3.20	3.16	3.14	3.17	2.99	2.94	3.19	3.03	2.88	3.09	3.27
生物資源学部 (1004)	0.58	0.58	0.72	0.90	0.68	0.82	0.64	0.67	0.69	0.70	0.65	0.69	0.69	0.56	0.67	0.73	0.73	0.66
生物資源学科 (1004)	2.77	2.34	3.13	3.03	3.30	3.11	3.50	3.27	3.28	3.25	3.29	3.14	2.98	3.27	3.11	3.02	3.16	3.31
看護学部 (1466)	0.44	0.60	0.67	0.86	0.65	0.78	0.62	0.70	0.68	0.68	0.62	0.67	0.74	0.58	0.69	0.73	0.73	0.67
看護学科 (945)	2.80	2.35	3.11	2.98	3.31	3.08	3.55	3.31	3.30	3.23	3.35	3.16	3.00	3.28	3.11	3.03	3.17	3.34
看護学専攻 (15)	0.43	0.57	0.68	0.85	0.67	0.77	0.60	0.68	0.66	0.65	0.59	0.63	0.71	0.55	0.67	0.70	0.72	0.66
海洋生物資源学科 (1004)	2.75	2.33	3.14	3.07	3.29	3.13	3.45	3.24	3.25	3.27	3.24	3.10	2.97	3.27	3.11	3.01	3.15	3.29
看護福祉学部 (2401)	0.45	0.64	0.66	0.87	0.66	0.80	0.64	0.71	0.69	0.68	0.65	0.71	0.77	0.61	0.70	0.76	0.74	0.68
看護福祉学科 (1466)	2.85	2.37	3.25	3.14	3.46	3.26	3.56	3.38	3.40	3.35	3.33	3.24	3.15	3.32	3.28	3.20	3.37	3.46
看護福祉学専攻 (15)	0.38	0.59	0.64	0.78	0.60	0.74	0.59	0.64	0.62	0.59	0.60	0.60	0.68	0.58	0.63	0.68	0.65	0.62
看護学専攻 (15)	2.87	2.37	3.26	3.10	3.47	3.22	3.56	3.37	3.39	3.35	3.35	3.27	3.15	3.32	3.26	3.22	3.36	3.46
看護学専攻 (15)	0.37	0.59	0.66	0.78	0.61	0.77	0.61	0.66	0.64	0.60	0.62	0.61	0.70	0.61	0.65	0.68	0.66	0.64
社会福祉学科 (945)	2.82	2.36	3.23	3.19	3.46	3.31	3.58	3.39	3.41	3.34	3.30	3.19	3.15	3.32	3.30	3.16	3.38	3.46
社会福祉学専攻 (15)	0.40	0.58	0.62	0.79	0.57	0.68	0.55	0.60	0.59	0.56	0.57	0.58	0.65	0.53	0.60	0.66	0.63	0.58
科目等履修生・聴講生 (15)	2.80	2.13	3.00	2.87	3.47	3.00	3.73	3.40	3.27	3.27	3.20	3.14	2.93	3.13	2.87	2.80	3.00	3.47
科目等履修生・聴講生 (15)	0.40	0.34	0.52	0.88	0.50	0.63	0.44	0.49	0.44	0.57	0.40	0.35	0.46	0.34	0.72	0.65	0.52	0.50
入学年次別 (7855)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
97年生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
98年生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
99年生 (4)	2.00	2.00	3.00	3.00	4.00	3.25	3.75	3.75	3.50	3.50	3.50	3.25	3.00	4.00	3.75	3.50	3.25	4.00
00年生 (4)	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	0.83	0.43	0.43	0.50	0.50	0.50	0.83	0.00	0.00	0.43	0.50	0.83	0.00
01年生 (44)	3.00	2.25	3.25	3.25	3.25	2.75	3.25	3.00	3.25	3.00	3.00	2.75	2.25	3.00	3.00	2.75	3.00	3.00
02年生 (36)	2.70	2.28	3.40	3.56	3.60	3.34	3.61	3.30	3.21	3.06	3.39	2.94	2.97	3.50	2.89	2.61	3.09	3.30
03年生 (432)	0.50	0.62	0.62	0.79	0.62	1.00	0.65	0.79	0.79	0.88	0.68	0.79	0.74	0.50	0.80	0.93	0.68	0.80
04年生 (875)	2.87	2.11	3.14	3.17	3.53	3.42	3.72	3.36	3.37	3.33	3.36	3.35	2.69	3.41	3.22	2.72	3.26	3.62
05年生 (2586)	0.60	0.52	0.54	0.77	0.55	0.79	0.51	0.63	0.64	0.47	0.75	0.57	0.91	0.49	0.88	0.77	0.60	0.49
06年生 (3874)	2.68	2.28	3.25	3.21	3.49	3.19	3.68	3.34	3.37	3.33	3.29	3.05	2.81	3.23	3.26	3.07	3.41	3.52
07年生 (7855)	0.52	0.61	0.68	0.83	0.65	0.79	0.62	0.72	0.67	0.69	0.73	0.69	0.89	0.66	0.67	0.71	0.68	0.65
08年生 (875)	2.69	2.32	3.13	3.13	3.39	3.16	3.54	3.23	3.30	3.33	3.31	3.10	2.98	3.28	3.18	3.03	3.26	3.38
09年生 (2586)	0.54	0.59	0.75	0.91	0.63	0.80	0.60	0.70	0.65	0.64	0.63	0.68	0.73	0.55	0.66	0.73	0.72	0.64
10年生 (3874)	2.72	2.28	3.03	2.88	3.27	3.09	3.45	3.26	3.25	3.20	3.23	3.10	3.00	3.23	3.09	2.89	3.13	3.31
11年生 (7855)	0.51	0.58	0.69	0.86	0.65	0.78	0.62	0.67	0.68	0.66	0.62	0.65	0.69	0.57	0.67	0.73	0.72	0.66
12年生 (7855)	2.80	2.35	3.15	2.94	3.31	3.06	3.47	3.28	3.27	3.23	3.25	3.14	3.06	3.24	3.10	3.03	3.21	3.32
13年生 (7855)	0.44	0.60	0.65	0.86	0.64	0.80	0.61	0.65	0.66	0.65	0.62	0.63	0.66	0.57	0.67	0.71	0.69	0.65
学部学科別 (7855)	2.64	2.25	2.96	2.72	3.22	2.91	3.43	3.19	3.15	3.11	3.16	3.01	2.91	3.13	2.97	2.84	3.08	3.24
経済学部 (1602)	0.56	0.58	0.71	0.95	0.65	0.84	0.62	0.66	0.68	0.68	0.64	0.64	0.68	0.53	0.67	0.73	0.72	0.66
経済学科 (1342)	2.80	2.34	3.13	3.05	3.27	3.09	3.49	3.25	3.24	3.27	3.29	3.12	2.94	3.27	3.09	2.97	3.13	3.29
経営学科 (1633)	0.42	0.59	0.68	0.87	0.65	0.78	0.62	0.69	0.68	0.66	0.62	0.67	0.75	0.60	0.69	0.74	0.75	0.66
看護福祉学部 (1633)	2.89	2.37	3.30	3.18	3.50	3.32	3.59	3.38	3.42	3.39	3.34	3.25	3.16	3.34	3.33	3.24	3.44	3.52
看護福祉学専攻 (15)	0.53	0.57	0.61	0.73	0.57	0.68	0.56	0.63	0.59	0.56	0.58	0.57	0.65	0.55	0.63	0.58	0.58	0.58
一般教養 (3278)	2.71	2.32	3.09	2.93	3.30	3.07	3.46	3.27	3.27	3.20	3.24	3.10	3.03	3.24	3.09	3.01	3.17	3.31
一般教養 (3278)	0.52	0.61	0.68	0.86	0.66	0.80	0.63	0.67	0.68	0.67	0.64	0.67	0.69	0.59	0.67	0.73	0.71	0.66
規模別 (7855)	2.72	2.26	3.07	2.82	3.30	2.99	3.48	3.25	3.25	3.21	3.22	3.10	2.99	3.22	3.07	2.88	3.18	3.30
100人以上 (4408)	0.52	0.60	0.70	0.89	0.64	0.81	0.61	0.67	0.68	0.66	0.65	0.64	0.69	0.56	0.68	0.73	0.71	0.66
100人未満 (3447)	2.78	2.39	3.18	3.13	3.35	3.23	3.50	3.30	3.31	3.27	3.30	3.14	3.05	3.27	3.17	3.06	3.23	3.38
100人未満 (3447)	0.43	0.58	0.65	0.82	0.64	0.74	0.62	0.67	0.65	0.65	0.60	0.66	0.71	0.59	0.65	0.71	0.70	0.64

## 2.2.2 結果の分析

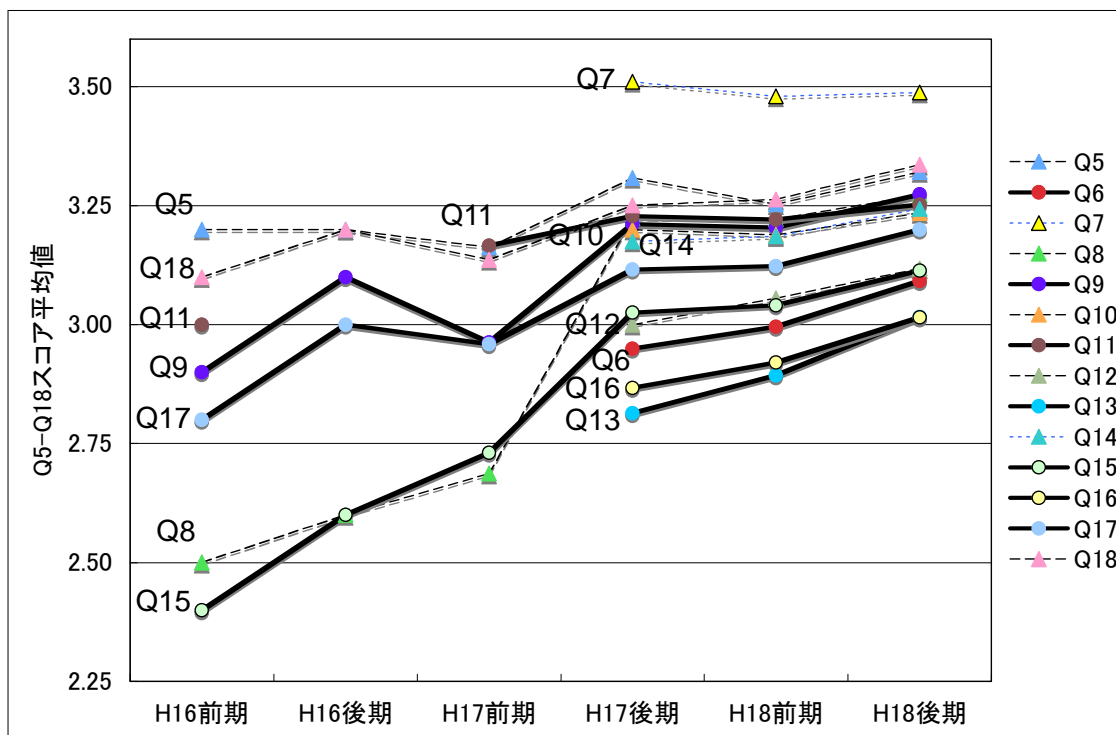
### (1) 経年変化（部局別）

6学期の共通項目で、かつ教員に係わる項目「授業の方法」「教員の積極性・熱意」「総合評価」の3つを対象に、FDサイトに開示している分類（部局、教室サイズ）についての経年変化をグラフ化して以下に示す。「方法」に対する学生の評価は、全部局にわたり当初4学期の間に高まっている。「総合評価」も「方法」程ではないが同様の傾向にある。「積極性」は授業評価導入前から全体を通じて高く、授業評価による変化は小さい。2005年前期の評価は、2004年とほぼ同じ授業評価項目であるにも関わらず全部局で低下しているが理由は不明である。改善効果は、2006年度でほぼ一定の評価に収束しつつある部局が多い。教室別にみると、100人未満の教室の改善が大きく、符合して少人数授業が多い部局の改善傾向も高い。一方、100人以上の大教室授業の改善傾向は、あまり大きくない。ただ、2006年後期に改善が見られ、対応する部局の評価も同様である。大教室授業の改善には教室環境の改善など、教員の努力以外の方策も求められよう。



## (2) 経年変化（設問別）

ここでは、各設問について全体での平均値の経年変化について調べた結果について示す。



Q8（授業速度）、Q13(シラバスの有効性)、Q15（内容の理解度）の平均スコアで緩やかな増加傾向が見られた。こうした変化が有意なものかどうか検証することも含めて、こうした傾向が授業改善を反映しているかどうか、もし反映しているのであればその要因は何かを分析する価値は十分あると思われる。

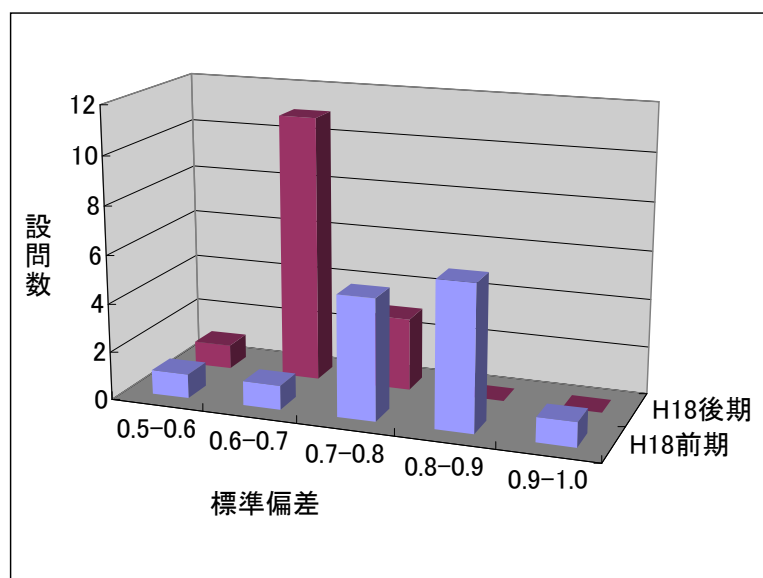
Q5（教員の熱意）、Q7(公平性)、Q14(シラバスとの整合性)、Q18（総合評価）は横ばい傾向を示した。教員の積極性、公平性、シラバスとの整合性、総合評価は次に述べる標準偏差も小さく、評価がある程度一定していることが伺える。積極性や公平性などに問題が生じた場合は自由記述欄に記入することができることを考えると、授業の改善に本当に必要な設問かどうか、今後の検討が必要と思われた。ただし、総合評価については授業評価という性格上、改善という目的とは別に必要であるという意見があり、これについてFD部会では異論は無かった。

平均スコアの設問間のバラツキが小さくなってきた傾向が見られた。要因には、問題数の増加、授業評価への慣れ（マンネリ化）、改善による効果などが考えられるが、詳細は今後の継続的な評価結果と解析を待つ必要がある。

今後、統計解析等も用いた原因の分析が必要だが、問題数は10問程度が評価としては適切かもしれない。できれば専門家による検証を御願いたい。こうした解析結果についてもできれば学生にも開示し、授業評価の有効性をアピールすることが望まれる。

### (3) 標準偏差の開示

H18年度のアンケートから開示された標準偏差について設問数の度数分布を調べた。



バラツキの大きさからは回答の分布が極端に画一化されていないことを示しており、授業評価アンケートに対して真摯な学生側の回答姿勢がうかがえる。マンネリ化させアンケートを形骸化させることがないように、アンケート結果のフィードバックを積極的に推進し、有効活用して行くことが求められる。ただし、設問によっては母集団が正規分布には従わない可能性があるため、標準偏差が1程度かそれ以上となる設問については度数分布等の検討が必要と思われる。また、実施時期でも分布に大きな変化が認められたが、この違いが実施時期の違いによるものか、その他の原因によるものかは継続的なデータ収集と詳細な調査・解析が必要である。設問ごとの標準偏差の大小にも一定の傾向が認められるので、設問の採用不採用の判断基準としても有用な情報を与えるのではないかと考えられ、この点についても今後の継続的な調査が望まれる。

### (4) 解析方法

平均値および標準偏差の算出については、全授業についてアンケート実施した前期または後期のうちに公開できる仕組みを整えることができた。さらに授業改善につなげるため、クロス統計の必要性等が提案されたが、具体案の検討まで進むことができなかった。データの管理や運営方法も含めて、今後の継続的な検討が必要である。

### (5) 解析結果公開方法

大学の設備改善への取り組みへ今後どのようにしてつなげるか？ また、授業評価がどの程度授業改善につながっているかをどうやって評価するのか？ これらを踏まえて何をどのように公開するのか具体的に決める必要があるが、この点については議論することが十分できなかった。今後のFDへの取り組みに期待したい。

## 6. 授業公開

### 3.1 授業公開の意義

授業公開とは、従来学生のみ公開されてきた授業を他の教員に公開し、授業の方法論についての授業後の検討会で意見交換することにより、参加する個々の教員の授業改善を目指すものである。

2006年度FD部会において授業公開を主に担当したのは田中求之助教授・瓦井昇助教授・津村文彦講師の3名である。

### 3.2 スケジュールと指針

#### 3.2.1 スケジュール

2006年度の授業公開に関するスケジュールは以下の通りであった。

##### 【2006年度】

- 2006年6月14日：【小浜キャンパス】前期授業公開（生物資源分析化学，水田尚志助教授）
- 2006年6月14日：【福井キャンパス】前期授業公開の告知・募集開始（6月20日締め切り）
- 2006年6月24日：【福井キャンパス】前期授業公開案内を配付
- 2006年6月26日～7月7日：【福井キャンパス】前期授業公開期間（13コマの授業公開）
- 2006年8月7日：第2回部会にて前期実施の報告
- 2006年12月21日：第3回部会にて後期実施案を協議
- 2006年12月27日；【福井キャンパス】後期授業公開の告知・募集開始（1月10日締め切り）
- 2007年1月11日：【小浜キャンパス】後期授業公開（水族病理学，宮台俊明教授）
- 2007年1月15日：【福井キャンパス】後期授業公開案内を配付
- 2007年1月15日～1月26日：【福井キャンパス】後期授業公開期間（4コマの授業公開）
- 2007年2月9日：第4回部会にて後期実施の報告

#### 3.2.2 指針

2005年度後期に作成した基本方針とガイドラインについて、本年度も継続して使用した。今後も大幅な修正なく使用することができるだろう。基本方針とガイドラインは、授業公開の案内の際に文書に明記することによって、各教員の授業公開への理解を促した。

##### (a) 基本方針：〔授業公開は授業改善への関心を高めることを目的とします〕

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得るための機会を提供することを第一の目的とします。

授業公開は模範授業ではありません。大学教育において一つの理想型などあり得ず、教育の自由が保障されるなかでこそ、より良い授業を育むことができるでしょう。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを目指すものです。



(b) ガイドライン：[授業公開に参加するうえで守っていただく約束事]

- (1) 授業の方法・工夫に注目する
- (2) 積極的に意見を交換する
- (3) 授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない
- (4) 授業の障害にならないよう配慮する

### 3.2.3 授業公開・討論会の進行

0. 事前に事務局より送付された「授業公開調査票」を準備しておく

1. 授業開始

2. 初めに、学生に向けて、今回の授業が他の教員に公開されることを伝える。

3. 参観教員に「授業公開調査票」を配付する

4. 授業開始

特別に準備をした授業ではなく、なるべく通常の授業の短縮版を行うのが望ましい。

5. 授業終了

授業時間は 60 分から 75 分程度に短縮し、残りの時間を討論会に当てることが望ましい。ただ参観教員の人数によっては、討論会の時間を増減して構わない。たとえば参観教員がごく少数の場合は授業を 85 分行い、残りの 5 分を簡単な討論会としてもよい。

6. 討論会開始

討論会への学生の参加を求める場合は、引き続き討論会を開始する。教員のみで討論会を行う場合は、学生を退席させたのち、討論会を始める。討論会の司会は、授業担当教員が行う。

7. 討論会終了

調査票を回収後、授業公開終了。

8. 授業担当教員は、1 週間以内に FD 部会にメールで授業公開の概要を報告する

報告内容は次の 8 点とする：(1) 授業名・日時、(2) 教員名、(3) おおよその学生の出席人数、(4) おおよその教員の参観人数、(5) 授業公開・討論会の感想、(6) 調査票についての感想、(7) その他授業公開についての意見。

報告は、FD部会のメーリングリスト宛て：<[ml-fd@ml.fpu.ac.jp](mailto:ml-fd@ml.fpu.ac.jp)>とする

### 3.3 前期の実施概要

#### 3.3.1 実施実績

福井キャンパスにおいては、2005年度後期と同じ形式で、授業公開期間を2週間にかけて設定し（6月26日～7月7日）、希望者が授業を公開する形式を取った。授業公開の希望は13コマあった。小浜キャンパスでは、従来と同じ方式で、一教員が6月14日に授業公開を実施した。

表1 2006年度前期授業公開（福井キャンパス）

月 日	時 限	講義名	教員名	教室	学生数	参観者
6/27,火	5	演習 II	西崎	E201	—	参観者なし
6/28,水	1	経済政策	廣瀬	L110	?	5名（工藤、服部、清水、津村、木野）
6/28,水	1	情報基礎演習	菊沢	第1情報演習室	40	1名（亀田）
6/28,水	1	生物物理化学 II	日び	L204	—	参観者なし
6/29,木	2	宇宙科学	中村	L107	50	1名（津村）
6/30,金	2	情報システム	田中	L112	30	1名（工藤）
7/3,月	2	生産管理論 I	木野	L112	20	2名（服部・工藤）
7/5,水	2	遺伝学 I	村井	L205	—	参観者なし
7/5,水	2	教養ゼミ	柳田	N502	12	1名
7/6,木	2	環境生物学	吉岡	L205	—	参観者なし
7/7,金	1	栄養食糧概論	斎藤	L210	30	1名（伊藤）
7/7,金	2	数理経済学	服部	第1情報演習室	11	2名（廣瀬・伊藤）
7/7,金	4	西洋史	伊藤	L107	100	1名（津村）
合計：のべ						15名

表2 2006年度前期授業公開（小浜キャンパス）

月 日	時 限	講義名	教員名	教室	学生数	出席者
6/14,水	1	生物資源分析化学	水田	M203	32	5名

表3 部局ごとの公開コマ数と参加教員数（2006年度前期）

	経済	経営	生物	海洋	看護	福祉	学教	情報	合計
公開コマ数	2	3	3	1	1	1	2	1	14
参観教員数	4	1	0	5	0	0	3	0	13
教員数	20	18	24	22	31	19	26	3	163

### 3.3.2 実施教員による授業公開の報告より

#### (1) 授業公開・討論会の感想（個別の授業内容についてのコメントは省略）

- ・ 共通の教授技術が多く、非常に有意義な議論ができた（情報演習と英語教育）。
- ・ 今回の授業公開で今後の参考になる貴重なご意見をいただいたことを感謝いたします。授業の直後に検討会を開いていただき、参加いただいた先生方からの生の声をお聞きすることはとても有益だと感じました。
- ・ テキストの選定、授業の進め方、板書、学生の理解度把握方法などについて、有意義な意見を頂くことができた。全体の感想として、今まで「まあこんなもんでいいか」と思っていたことについて、ご指摘を頂くことが多くあった。さらなる授業のレベルアップにむけて、常に自分で「これでいいのか？」と問いかけながら、学生さんの満足度を高める講義を目指していきたい。
- ・ ゼミ形式の公開授業であったが、学生はほとんど緊張することもなく積極的にディスカッションしていた。ただ参観教員が少なかったのは、一般の講義と形態の異なるゼミ形式の授業であったことからやむを得なかったのかもしれない。
- ・ 授業公開の難しさを感じた。いつも通りするという事は、ほとんど不可能。
- ・ 聞く人によって、正反対の評価が出ることも分かった。それ自体は意味のあることだろうが...（難しい内容を簡単に話している←→学生にとっては初めての内容でわかりにくいかも）。
- ・ ガイドラインの大切さがわかった。これから外れた議論では肝心の中身について議論が深まらない。今回は講義の内容や狙いに踏み込んだ議論が中心であったため、技術的な内容が二の次になった。実施者もガイドラインの大切さをもっと強調された方が良いと思う。
- ・ 参観人数が少なくてさみしい。
- ・ 事前にレジュメのようなものを配って授業内容を把握してもらおうというのは検討に値すると思う。

#### (2) 調査票についての感想

- ・ 授業方法を大きく変えることについてアドバイスを受けたが、必修科目ではそのような大きな変化は難しいと思われる。
- ・ 公開授業の案内書としてみると良くできています。が、資料として残すつもりなら、日付欄が必要でしょう。

#### (3) その他授業公開についての意見

- ・ 教室の設備が問題になりました。プロジェクターを使っていますが、スクリーン周辺だけ照度を落とす照明になっていません。また、スクリーンを下ろすと黒板の大半が覆われてしまい、板書と併用ができません。講義は板書だけ、幻灯だけでするものではないので、是非改善していただきたい。
- ・ もう少し早めに公開することを知らせて欲しかった
- ・ 参加者数が部局によって差がある。今回は2限目公開の授業が多く、参加しにくかった。公開する授業数を増やすべし。
- ・ 参観人数が少ないなど、問題もあるかも知れないが、有益なところも多いので、気長に続けていくといいと思う。
- ・ できる限り多くの教員が参加すべきである。次回は少なくとも今回以上の教員に出席して欲しい。
- ・ 非常に有意義な取り組みであると思うので、FD 部会のみなさんは大変だと思うが、是非、今後とも続けていって欲しい。また、現在は、有志の教員相互での研鑽というイメージがあるが、こうした取り組みについて、事務サイドや自治会などの学生代表も参加して、本学の教学レベル向上に、全学的に取り組んでいければと思う。
- ・ 授業を公開する教員も参観する教員も、もともとFDに関心の高い教員であるため、今のよ

うな方式では教員格差が広がり、大学全体の授業能力改善には功を奏さないのではないかと懸念される。

- ・ 2つの授業公開を参観したが、すべて参観教員が少ないことが気になった。公開する授業を抽選等によって減らし、代わりに、何らかの形で参観を強化したほうが良いかも知れません。
- ・ 報告書は Web でフォームに記入する形で提出できるとよいのではないのでしょうか？すぐに報告できますし、データとして扱いやすくなると思います。

### 3.3.3 前期授業公開の総括

#### (1) 実施方法

昨年度後期から実施している、「複数の授業公開を行い、関心の近い授業に参観し、議論を行う」というスタイルは、さまざま授業のタイプ（少人数ゼミ形式／大人数／演習形式／実験形式ほか）がある本学での授業公開としては有効な方法であると考えられる。今後も、この方法での授業公開を行っていくのが望ましいであろう。

「公開される授業」の数は、学部・部局ごとに偏りがあるが、現状程度でそれほど問題はないと思われる。重なった時間帯については配慮が必要だが、2週間の期間を確保しておくことで多少の調整も可能であろう。

#### (2) 課題

前回までの課題である「より多くの教員に参加してもらおう」ことは、今期も残念ながら達成できなかった。特に、参加教員が0という授業があったことを重く受けとめなければならない。いくら授業を公開されても参観する教員がいなくては、公開する側のモチベーションも維持できない。次回以降、「授業を参観する教員をいかに増やすか」について、何らかの策を講じる必要があるだろう。

また、この問題の背景には、以前から指摘されていたことではあるが、FD活動の理解と取り組みに関して、教員間の間でかなりの温度差があることがある。この根本的な問題を解決しないかぎり、上の指摘にもあるように、現状のままではFDに関心を持つ者と持たない者との間の教員格差を広げるだけで、全学的な授業能力の改善にあまり効果がないということになってしまう。ただし、この教員間の関心や取り組みの差については、先進校においても根が深い問題であるようであり、有効な解決策を見出すのは難しいと考えられる。FDが教員の主体的な授業改善の支援であるかぎりは、不可避免的に生じることだと、受けとめるしかないのかもしれない。

先に挙げたように「授業を参観する教員をいかに増やすか」というのが、授業公開実施として具体的に取り組むべき問題となる。また、今回の「参加者なし」の影響を最小限に食い止め、公開する授業数を今期並みには確保すること、さらには公開する教員／参加する教員が固定しつつある現状をいかに変えて行くかという、より根本的な問題も考える必要があるだろう。

そのための方策として、参加に強制を課するという方法もあるが、これについては反発も予想され、また形式的な参観が増えることによって実質を損なう恐れもある。強制を課さないで現状を改善していくには、地道に教員の関心を掘り起こしていくしかない。そのためには、授業公開を担当／参加した教員を集めて授業公開に関する討論会をFDセミナーとして開催するのも良いかもしれない。

また、FDの性質上、授業改善に関して教員の格差が生じるのは不可避であると割り切り、FD部会としては、せめて熱意のある教員だけでも支援するとするのをもひとつの考え方としてあるだろう。

### 3.4 後期の実施概要

#### 3.4.1 実施実績

福井キャンパスでは、今年度前期の実施結果を踏まえ、参観人数を確保するために、後期には授業公開の方式を大幅に変更した。基本的には公開希望を募るが、基本的には、FD 部会委員がまとめて、各部局ごとに公開する授業を少なめに設定することとした。少数の授業を部局ごとに責任をもって公開することにより、参観教員数を増やすことを狙ったものである。

小浜キャンパスにおいては、従来と同じ方式で、一教員が6月14日に授業公開を実施した。

表4 2006年度後期授業公開（福井キャンパス）

月 日	時限	講義名	教員名	教室	学生数	参観教員
1/18,木	3	成人臨床看護学 I	高原	L113	46	5名（菊沢・國分・塚越・福原・山崎）
1/24,水	2	生物分子工学	池田	L204	14	5名（石川・伊丹・加藤・黒川・日比）
1/25,木	4	芸術学	北村	L208	31	9名（片山・加藤まどか・亀田・菊沢・塩野・田中武之・津村・中村匡, 大塩）
1/29,月	2	生産管理論 II	木野	L111	10	2名（菊沢・津村）
合計：のべ						21名

表5 2006年度後期授業公開（小浜キャンパス）

月 日	時限	講義名	教員名	教室	人数	出席者
1/11,木	2	水族病理学	宮台	M204	19	5名

表6 部局ごとの公開コマ数と参加教員数（2006年度後期）

	経済	経営	生物	海洋	看護	福祉	学教	情報	合計
公開コマ数	0	1	1	1	1	0	1	0	5
参観教員数	0	0	5	5	4	1	6	2	23
教員数	20	18	24	22	31	19	26	3	163

先学期との最大の違いは、福井キャンパスの授業公開実施方法である。今学期は参観教員を増やす試みとして、部局ごとに一つ選出したコマについて授業公開を実施する方法をとった。当該部局のFD委員が積極的に参加を呼び掛けて、部局内の教員の参観を促すことが狙いであった。先学期の参観者数と比較すると、生物資源学科、看護福祉学部などで大幅な参観者の増加が得られた。ただ経済学部においては参観教員がひとりも見られず、今後への大きな課題を残した。

授業公開と検討会の具体的な方法については、大きな問題はなかったが、討論会などでくみ上げられる教室の施設に関する要望などを大学当局に伝えられる経路を確立するの必要を感じた。

### 3.4.2 実施教員による授業公開の報告より

#### (1) 授業公開・討論会の感想

- ・ 授業に対する意見を聞くことは思っていた以上に有意義でした。今までは参加することはなかったのですが、大変な刺激を受けます。今まで参加されなかった先生方、一度経験なされてはいかがでしょうか。(海洋)
- ・ マンネリ化しやすいので、刺激があっても良いかも...緊張しますが、アドバイス頂ける点がよいと思います。しかし、学生も緊張するようですね。頻回にはしたくないですね。(看護福祉)
- ・ 参観の先生方は、そのほとんどが若手の意欲的な方々で、下からのプレッシャーを感じはしましたが、自分が授業において工夫している点を指摘していただき、再確認したり、新たな問題点を認識できたことは有益でした。一般論として、教壇に立つ者には、定期的にこのような経験が必要であると思われます。高校以下の学校では研究授業という授業公開が以前より慣例となっていますが、大学の授業も独善化することを避けるためにも他の教員の視点を介したチェック過程が必要です。学生の内発的な学習意欲が弱めの大学では、授業をより効果的なものとするために、とりわけ重要だと思われます。(学教)

#### (2) 調査票についての感想

特になし。

#### (3) その他授業公開についての意見

- ・ 丁寧な講義ができるのは学生数が少ないからと感じた。少人数教育の重要性をFD部会からも大学当局に訴えて欲しい。(生物)
- ・ 参観者を増やすために、アナウンスの方法を考える必要があるのではないかと、参観している教官はいつも同じなので、参観したことのない教官が参加するような工夫が必要。(海洋)
- ・ 公開授業をビデオに撮って、参加できなかった教官も後で見られるようにしてはどうか。(海洋)
- ・ 自ら手を挙げて授業を公開したいという先生は少ないものと思われる。大学として授業改善に取り組んでいると言うためには、全教員が授業公開するように制度化する必要があるかもしれない。

### 3.4.3 後期授業公開の総括

#### (1) 実施方法

「概観」でも既にかいたが、今回のような部局ごとに1コマという数は参加者の人数を見ても適当だろう。今後はこの形式での授業公開の継続が望まれる。

現段階では、参観教員の記入した「調査票」はFD部会として回収していない。公開を行った教員が管理している。調査票の一次情報を蓄積できれば、授業公開に無関心な教員に対して、授業公開のメリットをアピールするための素材になるかもしれない。

### 3.5 今後に向けて

これまでの実施の反省を踏まえて、今年度の授業公開の事務的作業は比較的スムーズに行うことができた。その意味では、本学の授業公開の実施方法のフォーマットがほぼ固まった一年であったということができる。しかしながら、本質的な問題である参加教員数が少ないという点については、今年度も解決できなかった。特に前期において参観教員がいない公開授業があったということは、重く受けとめなければならないだろう。授業公開が定例的なものになり目新しさがなくなった分、かえって教員の関心を引かなくなったということ、あるいは法人化への会議などに時間がとられ公開授業に関わる時間的余裕がなかったこと等が今年度の参加教員の少なさの理由として考えられるが、やはり、根本的な問題として、FD活動への関心の低さがあることは否定できない。関心を持って活動する教員と、そうでない教員という二極化が生じているのが現状である。

もちろん、授業公開がすべての教員に役立つものとは言えないであろうし、授業形態が公開に向いていないものもあるだろう。また、各教員が自主的に授業の改善に取り組むのがFDである以上、強制化や義務化には馴染まないことはいうまでもない。このような状況の中で、いかにFDに関心のない教員をいかに引き込むかは、これからの大きな課題である。

来年度は大学院でFDが義務化され、その翌年度には学部でもFDが義務化される方向にある。このような状況で、授業公開を本学のFD活動の中心の一つとして運用していくのであれば、極端ではあるかもしれないが、より多くの教員が関心をもつように、なんらかの報酬を考えてもよいかもしれない。総合的な意味での授業評価（または教員評価）の一項目として、「公開」または「参観」が積極的に評価されるとか、研究費で若干の（1万円でも）優遇が図られるといったことが考えられるだろう。果たしてそこまでしなければならないものなのか。本学のFDのあり方、その中での授業公開の位置づけなど、つねに根本を問いつける作業が今後も必要である。

## 4. FD 研修

### 4.1 概 要

今年度の FD 研修の実施状況は、一覧表（「FD 研修概要」）のとおりである。年度当初の新任研修に始まり、学内でのワークショップを 5 回開催し、自主参加の学外研修も 2 件あった。前年度は全学的 FD 研修が中心であったが、本年度は、各部署の教育の内容および方法の特性に応じた研修が必要であるという観点から、各部署の FD 委員を中心に、各部署単位の FD 研修の企画・実施を推進することとした。研修の詳細については、各研修の実施担当者および学外研修参加者から提出された研修報告書（次節以下に掲載）を参照されたい。

（FD 研修概要）

分類	実施日	内容	参加者数
新任研修	4月20日	テーマ 05事業の概要と06事業の計画 場 所 福井キャンパス 形 式 講演 概 要 菊沢部会長によるFD事業に関する解説	6名
ワークショップ	6月15日	テーマ コミュニケーション研修 —聞かせ上手をめざして— 場 所 小浜キャンパス 形 式 講演＋グループワーク 概 要 第1部は、福田健氏(話し方研究所)による「聴衆を引きつける技術」に関する講演、第2部は、グループに分かれての3分間スピーチと討議、第3部は講師による総括	15名
ワークショップ	6月30日	テーマ eラーニング活用セミナー —eラーニング活用で効果・効率・魅力のある教育を— 場 所 小浜キャンパス 形 式 講演 概 要 内田実氏(メディア教育開発センター特定特任教授)によるeラーニングに関する講演と討議	9名
ワークショップ	7月3日 ～4日	テーマ インストラクショナル・デザイン ワークショップ IN 福井 場 所 福井キャンパス 形 式 演習 概 要 インストラクショナル・デザイン詳細企画書を実際に作成し、eラーニングコンテンツを開発するという事例を用いたインストラクショナル・デザイン演習	10名



ワークショップ	9月14日	<p>テーマ 看護実践能力を保証するための教育改善の取り組み —OSCEによる看護実践能力の総合評価の視点から—</p> <p>場 所 福井キャンパス</p> <p>形 式 講演＋グループワーク</p> <p>概 要 前半は、市村久美子氏(茨城県立医療大学教授)によるOSCEに関する講演、後半は、評価表作成のグループワークとOSCEの実演・評価と討議</p>	27名
学外研修	11月13日 ～15日	<p>テーマ 平成18年度看護学教育ワークショップ(文部科学省)</p> <p>場 所 かずさアカデミアホール(千葉県木更津市)</p> <p>形 式 講演＋グループワーク</p> <p>概 要 「大学、大学院教育とキャリア形成—資格取得との関係から—」と題した矢野真和氏(東京大学大学院教育学研究科教授)の講演、「社会が求める看護職のカー介護現場における看護活動から—」と題した西村和美氏(NPO法人デイサービス「このゆびとーまれ」副理事長)の講演、グループワークと討議</p>	1名
学外研修	11月18日	<p>テーマ 法政大学第4回FDシンポジウム 大学教育に役立つ評価 —GPA, 授業評価の活用とその実践—</p> <p>場 所 法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)</p> <p>形 式 講演＋パネルディスカッション</p> <p>概 要 「大学教育における評価のあり方とその活用—評価を評価する視点—」と題する大塚雄作氏(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)の講演、「GPA得点分布公表と教育改革」と題する圓月勝博氏(同志社大学教育開発センター所長)の講演、「学生の学を支援・促進するための成績評価制度作り」と題する西垣順子氏(大阪市立大学大学教育研究センター助教授)の講演と討議</p>	1名
講演会	3月6日	<p>テーマ 1年次教育の現状と課題 —教養, 専門基礎, リメディアルの交錯—</p> <p>場 所 福井キャンパス</p> <p>形 式 講演＋ディスカッション</p> <p>概 要 「1年次教育の可能性—大学における役割—」と題する菊池重雄氏(玉川大学コア・FYE教育センター副センター長)の講演と討議</p>	19名

## 4.2 新任研修

新任教員オリエンテーションが、4月20日（木）10:40～12:10に実施された。対象者は6名。FDに関しては、FD報告書2005を配布し、FD事業の概略を説明した。続いて、2006年度のFD事業計画、とくに、授業評価、公開授業、および予定に上がっているワークショップに関する要点を説明し、参加協力を依頼した。

## 4.3 ワークショップ

### 4.3.1 コミュニケーション研修

テーマ：聞かせ上手をめざして

講師：福田健（株）話し方研究所

日時：平成18年6月15日（木）13:00～16:30

場所：小浜キャンパス交流センター 104

参加者：15名

#### ■ 研修内容

はじめに「聴衆を引きつける技術」についての講義があり、その後、グループに分かれて一人ずつ3分間スピーチを行い、グループ内で改善点などを指摘しあった。最後に福田先生から聞かせ上手になるためのアドバイスがあり、全体の話を経括していただいた。

#### 第1部：講義

□ 聴衆を引きつけるためには、次の5つの点を注意すると良い。

- ・ 「見る」：誰がどこにいてどんな様子かを見渡し、相手の存在を意識するようにする。
- ・ 「間を取る」：いきなり話し始めず、少し間を取ってから話し始めると、相手が聞く姿勢になる。
- ・ 「問いかける」：話し始めの段階で、主題に関する問題を提起し、疑問を抱かせたり興味を持たせたりする。
- ・ 「動く」同じところにとどまらず、時々歩き回ったり、身振り手振りを取り入れることで聴衆の目を引きつける。
- ・ 「自己開示」：話の中で自分の考えや体験談をストレートに表現すると、相手が心を開いて素直に聞いてくれることがある。

□ コミュニケーションの決定権は聞き手が握っている。

- ・ 発信者の伝えたいことがそのまま受信者に伝わっているとは限らない。どのように受け取るかは受信者次第である。
- ・ 受信者を認識し、理解した上で、発信するのがコミュニケーションである。
- ・ 受信者の思いがけない受け取り方が、逆に発信者にとっては刺激となり、発信の仕方を見直すきっかけとなる。

#### 第2部：グループに分かれての発表&討議

4～5名ずつの3グループに分かれて、一人3分間でスピーチを行い、話す際の注意点や話す

内容についてグループ内で指摘しあい、コミュニケーションの取り方について討論した。スピーチのテーマは、学生の学習意欲を高める方法やこれからの大学教育のあり方、研究に関する方針など、各自で適当に選択した。スピーチをする際は、以下の点に留意し、スピーチの後にそれぞれの項目がどの程度達成されていたかを自己採点した。

- ・ 話し始めで間は取れているか
- ・ 相手とアイコンタクトを取り、目で話しかけているか
- ・ 明るく生き生きとした表情で話しかけているか
- ・ はっきりした発音で相手が聞き取りやすく話しかけているか
- ・ 何が言いたいのか、主題が一行化されているか
- ・ 話の入り方、切り出し方が工夫されているか
- ・ 内容が順序だって展開されているか
- ・ 具体的な表現で説明できているか
- ・ 要点を一言で簡潔に表現できているか
- ・ 相手がどのような立場の人間かを配慮して話しているか

### 第3部：総括

発表を受けて具体的なアドバイスをしながら、まとめの講演をしていただいた。

#### □ 発信者側が心がけること

- ・ 言葉に関心を持ち、語彙を豊富にすることを心がける。その上で、適切な言葉を選択し、組み合わせで表現する。
- ・ 身近なところか話材を見つけ、エピソードや比喩などを取り入れながら、話が単調にならないよう工夫する。
- ・ 相手の感情、情緒、心理までふまえて発信するよう心がける。

#### ■ 研修の感想

福田先生は、まさに「聞かせ上手」を実践されており、目配りや手振りやそぶりなどの動作もそつなく、大変参考になりました。どうしても抽象的、概念的になりがちな内容でも、自身の体験談や比喩などを交えてお話くださったので、全体を通して非常にわかりやすかったように思います。グループ討論は、少々照れくささもありましたが、話の展開の仕方について指摘しあうというのは自分にとって貴重な体験でした。時間が限られていたため、質疑応答の時間を設けることができなかつたのが残念でした。

#### 4.3.2 eラーニング活用セミナー

テーマ：eラーニング活用で効果・効率・魅力のある教育を～

講師：内田 実 特定特任教授（メディア教育開発センター）

日時：平成18年6月30日（金） 13:00～17:10

場所：小浜キャンパス交流センターLL 教室

参加者：9名

#### ■ 研修内容

##### □ eラーニングの変遷と定義

- ・ 1980年代後半から、学習コンテンツをCD-ROMなどで配布し、PCで学ぶ学習形態が導入されはじめた。90年代になると、ネットワークを介した学習コンテンツの配信、成績や履歴管理などが行えるようになった。90年代後半には、トレーニングよりもラーニング機能を重視し、ヘルプデスク、掲示板、チャット、メールの設置など、双方向性を高めた学習形態の導入が進められた。
  - ・ eラーニングとは、ネットワークを利用するもので、教育内容や情報の更新、保管、検索、配布、共有が即時に可能で、標準的なインターネットテクノロジーを使い、コンピュータを介してエンドユーザに届けられる。eラーニングは、学習というものを非常に広い視野で捕らえ、従来のトレーニング重視の考え方の限界を超えた解決する方法を提示するものである。
- 参加者各自の自己紹介（eラーニングに対する自分の姿勢、考え表明含む）
- ・ 日々の授業などに追われてできていない。コンテンツを充実するのが先決と認識している。
  - ・ コンテンツ作成などが必要だといわれているがどうしたらよいかわからない。学生への配信はできるが支援をどうしたらよいかわからない。
  - ・ WebCTは利用していない。コンテンツはPC上にあるが、著作権の問題がある。双方向性の授業をどうするか検討中。
  - ・ WebCTに教材（講義資料、レポート）などに利用しているが、アクセスは人によってばらばらで、授業で双方向性を確保するため、質問カードなどでカバーしている。
  - ・ WebCTに教材（講義資料、レポート、小テストの回答）、連絡事項や質問の受付などに利用しているが、学生間のアクセスの差が大きすぎる。WebCTを通して補習することで、授業の補助的効果がある。
  - ・ WebCTで授業関連（試験も含む）の対応を全て行っている。臨海センターにいるので、WebCTを利用した方が学生への対応がしやすく、学生にとってもレポートの提出や授業を休んだときの自習ができるので評判が良い。ただし、著作権の問題は大変気になっている。
  - ・ 実習指導が主体であり、講義を持っていないので使用していない。
  - ・ 特に学生からWebCTが良いという評判も聞かないので取り入れていないが、有効に利用できるものが使ってみたい。
  - ・ これまで興味も無く使い方も分からなかったので、WebCTは利用していない。eラーニングで何ができるのかが知りたくて参加した。
- eラーニング活用の現状と導入における留意点
- ・ eラーニングが失敗した理由として、利用者のニーズに合わない教育の提供、個別の要求に対応できない、学習後に活用できない、サポート体制（インストラクショナルデザイナー、学習支援、教材作成、メンターなど）が無い、などが挙げられる。
  - ・ 大学教育においても、録画授業をウェブに配信するだけでは、学生はあまり利用しない。キャンパスが離れている大学では有効なことがあるが、基本的には対面授業が中心となっている。
  - ・ eラーニングを取り入れている教官は数%に過ぎない。20%以上になれば、スパイラル的に利用者は増加する可能性が高いが、そこまでに引き上げるためには周到な対策を練る必要がある。
  - ・ eラーニングを成功させるためには、はじめにeラーニングありきではうまくいかない。

受講者と組織のニーズを調査（現状調査，教育対象となる作業や内容などを調査）する必要がある．次に初期分析，設計，開発，実施，評価を行うことになるが，それぞれの段階で評価し，その結果をフィードバックすることが大切．

#### □ eラーニングの設計，開発，実施方法

- ・ 「producer」というソフトを使えば，パワーポイントと授業動画などを並べて配信できる上，再生速度を調節できるので，学生は自分の都合や好みに合わせて自習することができる．
- ・ ICT@school (<http://www.nicer.go.jp/ictschool/#done>) というホームページでは，先生のためのICTスキル（コンピュータの基本操作を含む）を指導している．学生のスキルレベルも上げる必要がある．
- ・ リアルタイム評価支援システムREAS (<http://open.nime.ac.jp/software/reas>) は，デジタルコンテンツの評価支援システムとして開発されたWebによる調査・集計システムで，調査票を自分で作り公開することができる．K-tai Campus (<http://k-tai.nime.ac.jp/pc/>) では，携帯電話を通して情報を配信できる．
- ・ NIMEglad というサイトでは，キーワードに関連した学習コンテンツを検索できるので，コンテンツを作成する際に参考になる．

#### □ 全体討議

- ・ 本からコピーした図などを載せた配付資料をネットワーク配信することは，著作権問題に抵触するとのことで，eラーニングの導入に躊躇している．（回答：著作権の問題に関して，メディア教育開発センターのホームページ (<http://www.nime.ac.jp>) で著作権などの質問をすれば，何らかの対応をしてくれる）
- ・ eラーニングを導入すると，学習時間が25%短縮されたという効果が一般的に言われているが，それはモチベーションの高い企業での例であって，学生とはモチベーションが違うので，同じ土俵で比較できないのではないかと．大学では，どのようにモチベーションを高めるかが問題．
- ・ もう少し具体的な例を挙げながらeラーニングの導入が上手くいかなかった失敗例やその理由を説明して欲しかった．（回答：組織としてeラーニングを実施しないと失敗する可能性がある．ビジョンを明確にし，学長・学部長のトップダウン式で実施したほうが，eラーニングが定着する．）
- ・ 様々な教材開発のコンテンツを紹介してもらえたので参考になったが，当大学の学生のレベルやシチュエーションに合わせたeラーニングの利用法やその効果を説明して欲しかった．（回答：規模の小さな大学では対面授業が中心となるため，補習教材の配布やレポートのやりとりなど，授業の補助として活用する．）

### 4.3.3 インストラクショナル・デザイン ～ ワークショップ in 福井 ～

講師：内田 実先生（(独)メディア教育開発センター 特定特任教授）

日時：平成18年7月3日～4日

場所：共通講義棟 L104 教室

参加者：9名（生物資源学科教員8名，情報センター1名）

## ■ 研修内容

学習者にとって学習効果が高く、学習効率がよく、魅力のある学習を提供すること、また、教育者として教育効果が高く、教育開発実施全体で教育効率がよく、自分自身でもその教育に誇りと魅力を見出せる教育を実施すること、これらを実現する方法論、プロセスとしてインストラクショナル・デザインが提唱されている。今回は、「ID」詳細企画書を実際に作成し、eラーニングコンテンツを開発するという事例を用いて、実際にこのインストラクショナルデザインプロセスを体験した。

### 「IDの教員への普及」詳細企画書作成概要

項目	内容
タイトル名	IDを普及する
教育ゴール	福井県立大学の教員各位にIDを理解してもらい、効率が良くかつ効果的・魅力的な授業を行ってもらえるように、ニーズ分析に基づく授業設計と指導を普及する。
対象者	本学の教職員
学習目標数	項目
使用メディア	WEB（eラーニング）
学習支援方法	別途企画する
学習時間	60分（コンテンツの単純延べ動作時間） 実学習時間は1～2週間
コンテンツ構造	興味を引き自分との関係に気づかせたあと、説明とノートを作成を繰り返す。また、学習の開始時、終了時等に自分のレベルを自己評価する。
既存資料・関連教材	色々な関連資料はあるが、学習の中では直接は利用しない
評価方法	学習者の自己レベルチェックを開始時と終了時におこなうことにより評価する
制作期間	3ヶ月
制作プロジェクトリーダー	NIME 山村
制作コスト	見積もりコスト 3,000 千円（実開発費ではない）

#### 4.3.4 看護実践能力を保証するための教育改善の取り組み

テーマ：看護実践能力を保証するための教育改善の取り組み

－OSCEによる看護実践能力の総合評価の視点から－

講師：市村久美子先生（茨城県立医療大学教授）

日時：平成18年9月14日10時～16時

場所：共通講義棟L210教室，看護福祉学部棟N201多目的室

参加者：27名（看護学科教員22名，福祉学科教員2名，大学院生5名）

## ■ 研修内容

研修会は2部構成で実施した。まず、午前の部で市村先生から OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) について講義を受け、午後に OSCE の実際を体験する目的で、提示された課題に基づき評価表作成のグループワークと OSCE の実演・評価、ならびに全体討議を行った。

### 1. 講義 (午前の部)

#### 講義の主な内容

- ① OSCE が開発された背景へ動向など世界と日本における歴史
- ② OSCE の概要
- ③ OSCE の成立条件
- ④ OSCE の実際 (茨城県立医療大学)
- ⑤ OSCE 実施後の評価ならびに今後の課題

OSCE とは判断力・技能や態度など基本的臨床技能教育評価が不十分であるという問題に対応するために開発された臨床能力試験であり、1975年に英国で開発された。1990年代から医学教育に導入され、カナダの医師国家試験、USAでのECFMG(外国人医師の資格試験)などに採用された。今後、USAや韓国でも医師国家試験として導入予定である。日本では医学・薬学教育において知識中心の評価基準は高いものの臨床能力不足が指摘されるようになり、2005年に医学教育における共用試験として導入されたばかりである。

看護学教育においても看護実践能力の育成は重要課題であるが、看護技術やコミュニケーション能力など臨床技能に関する評価は困難な状況にある。教え放し、見学中心の実習となるなど臨床能力育成に多くの課題があり、長年に亘って議論されてきたが、教員各自の教育的努力はしているものの、看護教育全体として抜本的に改善されているとは言えない。そこで、茨城県立医療大学ではGPを受け、看護に必要な技能・態度価値観の評価法としてOSCEを看護学教育に導入し、実施するに至った。また、市村先生からビデオ映像によるOSCEの試験風景を紹介され、学生の実践能力の実態(奮闘ぶりと苦悩、苦笑を含む)と評価の実際を知ることができた。

市村先生はさらにOSCEを実施する際の様々な要件について講演された。まず、OSCEの前提条件として、臨床能力育成を軸とした教育内容と評価基準の明確化を行うことと、教員間の意志統一に時間をかけることである。次にOSCEの具体的方法としては、学年進行にあわせた課題とOSCEの実施、現実に限りなく近い信頼性のあるSP(模擬患者)の確保(市民から応募することもある)、OSCE実施のための場所と時間の確保などが重要であると話された。

茨城県立医療大学ではOSCE実施から約3年を経過するが、その教育効果は、

- ① 学習者の学習態度の向上(事前学習や復習する学習者の増加)
- ② 教員の教育評価へのフィードバックによる教育内容の改善
- ③ できる・できない看護技術の学習者自身の自覚と確認
- ④ 臨床実習前・卒業前の看護実践能力に対する学習者の不安の改善

などを挙げておられていた。また、OSCEによる評価は、教育測定として実技試験独自の妥当性が確保され、同一の課題・条件・評価基準が明確であるため信頼性が保証されている。その一方で、評価基準が評価者(教員・SP)によって不統一なこと、SPの能力による信頼性の確

保, 学生個人々の技術の得手不得手など臨床能力の内容の特異性などをどう改善していくかが課題である. さらに, OSCE 実施上の問題は, 過密な看護学カリキュラム構成の中で, 多くの人的資源と時間の捻出であった.

以上の内容で講演を終え, 質疑応答の主な内容は, 課題設定の基準とした根拠について, 評価の妥当性はどのように確保されるのか, カリキュラムとの整合性などがあった.

## 2. グループワーク・演習と討議 (午後の部)

### 1) グループワーク

参加者 4~5 名ずつの 4 グループに分かれ, 「腹部のフィジカルアセスメント」技術を OSCE の課題例として提示され, 評価シートを作成し発表を行った.

### 2) OSCE の体験演習

患者役 (大学院生) と学習者 (寺島先生) を設定し, 2 人の教員 (高原先生, 笠井先生) による評価を行った. 事例は, 大部屋に入院中の 3 日間排便のない患者に腹部触診を実施し, その結果を患者に伝えるという場面である.

演習後の意見交換では, 学習者役からは試験を受ける学生がいかに緊張しているか, 患者へ何を尋ねているのかなどの徐々に混乱してくる学生の気持ちがわかった. 一方, 評価者は評価シート項目の理解と評点を付ける際に評点の重みづけに迷う項目が多かった. また, 同じ場面であっても評価者 2 人の評価視点に食い違いもみられた.

### 3) グループワークと演習後の総括および意見交換

#### (1) 評価シート作成の留意点

- ① 評価ポイントの明確化
- ② 評価項目は評価しやすい用語で表現
- ③ 評価者による評価視点と評価基準 (0.1.2) 決定のための事前シミュレーション実施

#### (2) 評価結果の学生へのフィードバックの留意点

評価者である教員・SP は, まずは「良かった点, できていたところ」を指摘することを心がける. 特に, 教員は学習者の欠点を指摘することが習慣化されているため注意を要する.

## ■ 研修会を終えて

研修会は, 看護実践能力育成にむけた教育評価の実際としての OSCE について理解するところから始まり, 講義・グループワーク・演習と密度の濃い内容であり, 意見交換やグループワークは活発で, 和やかに, 賑やかな雰囲気でした.

この研修会は, 学生への実習前看護技術チェックの期間中にたまたま企画されたが, 参加した教員のなかには技術チェック評価表の作成と事前打ち合わせ, 技術チェックを実施していたこともあり, 非常にタイムリーな内容の研修会であった. その成果の一つに, 研修会後 (翌日) の教員から技術チェックの際に, 学生ができていないところを探し, 指摘しているだけの自分に気づいた. 意識しないと欠点の指摘だけになってしまいがちであることを痛感させられたなど, 基本的学生指導のあり方を考える一助になったという感想が寄せられた. また当学科では, 看護技術の指導は各教員まかせで行っていたが, 学科教員全員で, 教育成果をだし評価するという雰囲気になったのではないかと. 学生一人一人の実践能力をみた上で, フィードバックする重要性を感じたとの意見もあった.

講義については, 看護学教育の質を高める方法として OSCE の理解と実際についてイメージ



できなかったが、市村先生の詳細な講義内容と OSCE の実際が紹介され、理解が深まったという意見があった。市村先生が強調されていた点は、OSCE の導入によって学習者の能動的な学習態度はもとより、評価結果がダイレクトに教員の教育指導のあり方にフィードバックされ、導入後の教員の教育改善に役に立っているということである。OSCE 導入後 3 年を経過し、評価方法や基準の見直し、履修単位としての取扱い、時間と人材確保など課題は山積しているが、各教員の教育評価への成果は大きいと話されていた。

本学看護学科の教育目標は、社会の要請に応えられる確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた看護者の育成である。カリキュラムのなかで知識と技術・態度を統合した看護実践能力育成としての臨床実習の比重が高く、時間数も多い。今回の OSCE の研修会は学生が看護学の知識の統合、コミュニケーション能力、創造的に看護実践を行う能力など、看護実践能力の育成にむけた教員の教育改善の足がかりとなることを期待したい。さらにこの研修会は、現在取り組んでいる看護実践力評価につながると思います。

## 4.4 講演会

### 4.4.1 学術教養センターFD 研修会

テーマ：1 年次教育の現状と課題 ―教養・専門基礎・リメディアルの交錯―

講師：菊池重雄氏（玉川大学コア・FYE 教育センター副センター長）

日時：平成 19 年 3 月 6 日（火）13 時～15：30 時

場所：共通講義棟 L208 教室（福井 C）、M208 教室（小浜 C）

参加者：19 名（学術教養センター教員 9 名，経済学部教員 3 名，生物資源学部教員 3 名，情報センター教員 2 名，事務局職員 2 名）

#### ■ 研修内容

##### (1) 研修会の趣旨

近年、大学での 1 年次教育には、教養教育、専門基礎教育、導入教育、補習教育など様々な役割が期待されている。しかし、1 年次教育に対するこれらの多様な期待に大学全体として如何に答えるべきかは、なお今後の検討課題である。今回の FD 研修会は、玉川大学の菊池重雄氏による「一年次教育」をテーマとする講演と討論を通じて、教員が授業の技術や方法を学ぶとともに、教職員が 1 年次教育のあり方について議論し、思索を深めることを目的として実施した。

##### (2) プログラム

開会

挨拶

・菊沢正裕教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会長

講演

・演題 「一年次教育の可能性-大学における役割」

・講師 菊池重雄氏（玉川大学コア・FYE 教育センター副センター長）

討論

・「1 年次教育の現状と課題-教養・専門基礎・リメディアルの交錯-」

司会 津村文彦講師（学術教養センター）

閉会

### (3) 講演の内容

#### 1) 「1年次教育」の背景と課題

- 1年次教育が必要とされる背景には、大学の大衆化と大学全入時代の到来により、低学力学生や学習の目的が不鮮明な学生が増加したことがある。
- 大学生活や大学での学習を十分に理解していないとされる「大学教育ファースト・ジェネレーション」の学生の増加も、1年次教育が必要とされる理由の一つである。
- 多くの学生にとって、大学時代は、高校から大学へ（生徒から学生へ）、大学から社会へ（学生から社会人へ）の移行期にあたり、高校から大学への移行の促進と人生のさまざまな移行期を自力で乗り切れる人間の育成のためのプログラムを確立することが必要である。
- 1年次教育には、高等教育への転換教育、専門導入教育、教養教育、リメディアル教育といった様々な面がある。
- 入学生の傾向と各大学の社会的役割を踏まえた、それぞれの大学に最もふさわしい1年次教育プログラムを作りあげることが重要である。

#### 2) 1年次教育の展開

- 転換教育は、キャリア形成のための準備教育と位置づけるべきである。
- 転換教育では、大学の入口を重視し、大学と社会における成功（生存）を教える1年次教育（入口から教えるキャリア教育）を目的とすべきである。
- リメディアル科目は、大学教員の担当能力の問題（高校で教育成果が上がらなかった科目の理解を大学教員が促進できるかという問題）などがあり、一般的には、あまり成果を上げていない。

#### 3) 玉川大学の1年次教育

- 玉川大学は、21世紀の国際社会に柔軟に対応し、責務を負うことのできる人材の育成を建学の理念としていることから、日本社会と世界に貢献できる人材を養成することが玉川大学の役割だと考え、この理念の下で1年次教育のあり方を考えている。
- 玉川大学では、1年次教育を転換教育と位置づけて、高校生から大学生への円滑な移行のための援助、大学生としての学習力の育成、専門知識をもった教養人の養成、学生のアイデンティティの確立を目的とした教育を行っている。
- 1年次教育の科目として、全学部の学生を対象とする1年次教育プログラム「1年次セミナー」（春学期・秋学期各必修科目（2単位））を置いている。
- 1年次教育の到達目標は、学生としての自覚のある大学生活、自律した社会人の育成、学問の重要性の理解、学習の習慣と技術の習得、学生自身による将来設計、健全な生活習慣の涵養などである。
- 玉川大学独自の教科書（玉川大学コア・FYE教育センター編『大学生活ナビ』（2006））を作成し、1年次セミナーで全学共通の教科書として使用している。
- 全学をあげて組織的な1年次教育への取り組みを行った結果、教職員の危機感の共有、大学改革の方向性の共通理解、教員の意識改革を実現することができた。

### (4) 総括

今回の研修会は、学術教養センターの教員を対象としたのものであったが、1年次教育が大学全体の課題であることから、他部局の教職員に対しても参加の呼びかけを行った。当日は、学

術教養センター (9), 経済学部 (3), 生物資源学部 (3), 情報センター (2), 事務局 (2) の計 19 名の教職員の参加をうることができた。講演後の討論でもさまざまな質問や意見が提起され、1 年次教育について多面的に検討する場となったのではないかと考える。

また、研修会のアンケートでは、「1 年次教育について考える刺激になった」、「統一した視点・方針を出して教養ゼミをパワーアップしてはどうか」、「専門導入教育の意義を考え直したい」、「FD 委員に専門家が必要」といった趣旨のご意見、ご感想をいただき、今後の本学での FD 活動につながる部分もあったのではないかと考えている (アンケートの文面そのままではなく、内容を要約させていただきました)。

## 4.5 学外研修

### 4.5.1 平成 18 年度看護学教育ワークショップ

文部科学省主催、平成 18 年度看護学教育ワークショップ

研修および報告者 塚越フミエ (看護福祉学部)

このワークショップは、毎年文部科学省が主催し、大学において看護学教育に携わる教員が参加して、看護学教育の改善と開発を議論することを目的としたワークショップである。本年は 11 月 13 日 (月) ~ 15 日 (水) の 3 日間、千葉県木更津のかずさアカデミアホールで開催された。

#### ■ 研修内容

##### (1) はじめに

今回のテーマは、大学または大学院教育における人材育成の役割であった。テーマの重要性からして、このワークショップ参加者の条件は教授であることだった。

だが、なぜこの看護学教育ワークショップへ参加するために、FD の研修費が活用されたか疑問もあると思われるので、そのいきさつを簡単に述べておく。この出張は自分の研究費で行くことになった。しかし、そのほとんどを学会参加に費やしてしまっていた。そこで、このワークショップは FD と関連が深いという事から FD 関連の費用で出張できるよう配慮していただくことになった。そのために、出張後は FD 委員会へレポートの提出をすることが条件づけられた。出張の成果を報告することは、全学の教員の方々に、看護学教育の現状の一端をお知らせするのに良い機会であると考えている。この、3 日間で、話し合われた看護学教育のあり方についてその概要を報告する。

##### (2) ワークショップの開催の目的と背景 (参加資料から)

看護系大学に対する社会からの期待を踏まえ、各大学の人材育成の現状および課題を整理・共有することを通じて、社会の期待に応える人材育成のあり方を検討する。

看護基礎教育の目的は、看護実践能力の育成にある。看護実践能力は、資格者すなわち専門職者として認められた立場での実践を通して習熟される。したがって、基礎教育で保証されるべき実践能力は、生涯にわたる継続的な学習を前提とした上で、最も基本的な必要不可欠である範囲にとどまると考えられる。

一方、大学院では、基礎教育修了後の看護実践体験が重視され、個人の看護実践体験を織り込んだ大学院教育が追求されている。しかし、日本の看護系大学は、わずか 10 数年の間に急増し、本年 4 月現在大学は 144 校、大学院修士課程 87、博士課程 37 となっている。こうした

急激な変化に伴い、学習環境や条件が十分に確保できないことや大学院教育そのもののあり方や資格と関連した問題が出てきており改めて大学、大学院教育が果たすべき人材育成のあり方が問われる状況におかれている。

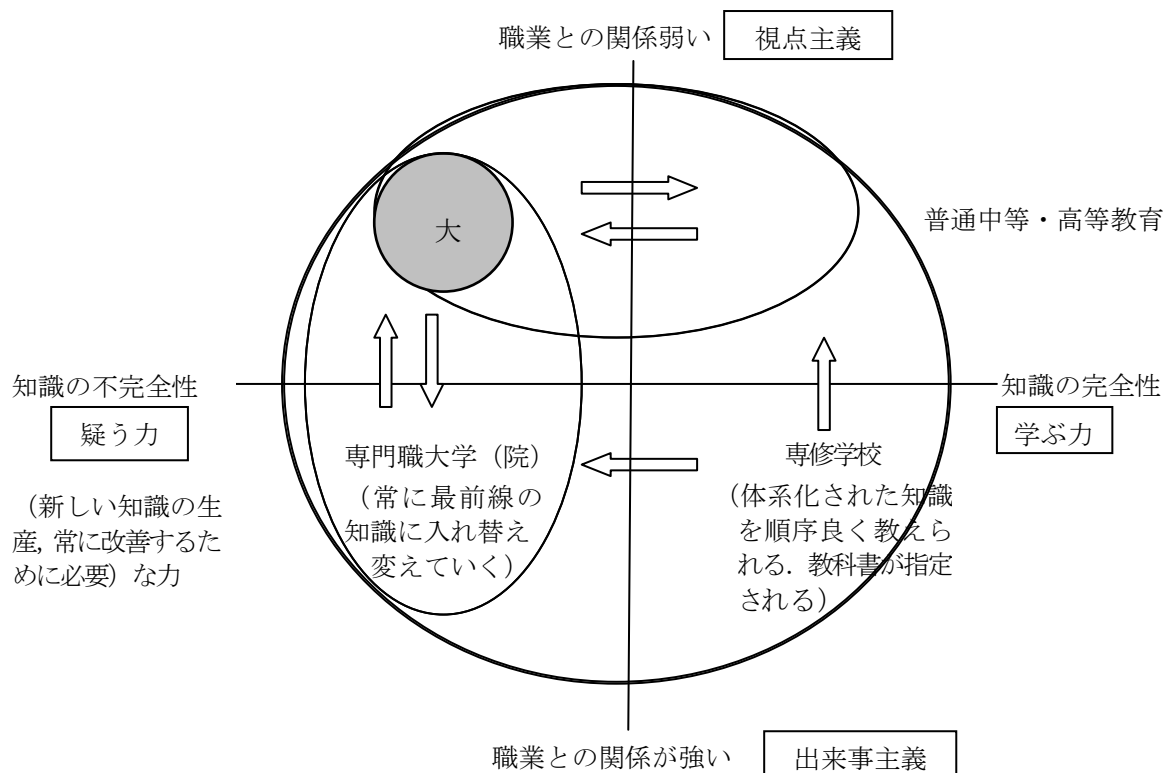
### (3) ワークショップの概要

ワークショップは、基調講演、特別講演、グループワーク、全体討議から構成されている。最初に、文部科学省高等教育医学教育課の三浦公嗣課長が、本ワークショップの目的および医療の変化と看護教育を取り巻く現状とその課題が歴史を踏まえて説明された。

#### 1) 基調講演

「大学、大学院教育とキャリア形成—資格取得との関係から—」と題した東京大学大学院教育学研究科の矢野真和教授の講演が行われた。主な講演内容は、変わる大学、変わらぬ知識の効用、「学びの習慣」の持続効果の3つであった。

1つ目の変わる大学では、今までの大学は、普通中等・高等教育から入り職業との関連が弱いと考えられていた。また職業的訓練や体系化された知識の習得を期待される専修学校とは異なると考えられ、下図のように位置づけられていた。しかし、これからの大学のあり方は、矢印の方向が示すように、学びはどこから入ってもよい、というNEO新制大学となるのではないかと説かれた。



2つ目の変わらぬ知識の効用では、いままで、学校の知識は役立たないといわれてきたが、そうではなく、知識は有効であることが隠蔽されてきたと自説を唱えた。3つ目の「学び習慣」の持続的な効果では、調査結果を示しながら現在の読書習慣と所得が関連していること、そして現在の読書の習慣は大学時代の読書習慣と関連するという間接効果を示した。

さらに、大学時代の学習熱心度は卒業時の知識・能力獲得と関連があり、その関連の度合いが高いほど現在の知識・能力獲得と高い関係がある。したがって、学生時代に学習習慣を身につけることは大変重要であることを力説された。最後に、大学全入時代というのは誤りである。何故なら経済的理由によって、まだまだ進学をあきらめている人が多い、こうした人たちが進学できるためには、経済の回復と授業料のCAP制の導入が必要であることが述べられた。看護の専門教育を担当する者にとっては、自信が持てる講演であったと共に、改善の視点も示唆された講演であった。

## 2) 特別講演

「社会が求める看護職のカー介護現場における看護活動から」と題した西村和美氏の講演であった。西村氏は富山県富山市富岡町 NPO 法人デイサービス「このゆびと一まれ」の副理事長である。認知症の高齢者や障害児、健康な子ども、ターミナル期の人に至るまで、健康・不健康、老若男女を問わず、何時でも誰でも利用できる施設が必要だと考えた3名の看護師によって設立されたという、この施設設立の目的とケアの実例が熱く語られた。施設は資金や法律上の困難を乗り越えて、既成概念にとらわれない人間味あふれるデイケア施設としていまや、その名は全国に知られ、多くの見学者が訪れている。看護師という資格をフルに活かし、社会の隙間をつなぎ合わせているような活動の数々が感動と共に手に取るように伝わってきた。この講演から、看護の活動は幅広く、ユニークな専門職であること、看護の企業という側面を学ぶことができた。

こうした2つの講演を受けて、第1日目の夜から8グループに別れ、ワークが始まった。学部教育5グループ、大学院教育3グループに分かれた。私は学部教育に参加した。

## 3) グループワーク

### [1] グループワークの方法

- ① 社会（学生、ケア対象者、チーム医療の現場等）のニーズ・期待を整理する。□人材育成の現状と課題を見直し、教育改善の方向性やアイデアを導き出す。□教育改善の方向性やアイデアを整理し、人材育成のあり方を考える。という順序に従って各グループはファシリテーターの支援を得ながら、ワークを実施した。

### [2] 全体発表、討議の結果

今後の学部・大学院教育が果たすべき人材育成に向けた教育改善の方向性やアイデアについて、各グループが整理し、発表した内容の中から、その一部を文章化せずに下記に示す。

#### ① 学部教育における人材育成のあり方

##### a. 大卒者に期待する学生の特質

実践能力と倫理性豊かな学生の育成

看護師として、人間としての成長と成熟

マネジメント能力を身につける（セルフマネジメント、キャリアマネジメント、組織のマネジメント、トップマネジメントこれらが重なり合って発展する）

変化する力（自己の成長と発達を促す力）

専門職としての力

脱病院主義看護・地球上どこでも活動できる能力

起業する力

- 他職種との連携・協働できる力
- 資源を生み出す共に、またそれを活用できる能力
- 自分に付加価値をつけることができる能力
- b. 教育方法とその工夫
  - 感性・意欲を高める意図的な体験学習
  - 学部や領域を超えた教育の協働
  - 臨床との連携またはユニフィケーション（現場と教育をよく知っている人が繋ぐ）
  - 地域に開かれた魅力ある大学
  - 大学を超えた組織作り—地域との連携
  - 地域の教育力の活用
  - 教育方法の改善，看護教育 8 領域がセクショナリズムを超え，教育の再構築をする
  - 地域看護学実習を 1 年次から実施する
  - 自己教育力を高めるカリキュラムの工夫
  - 多様な学生，医療の変化に対応できる柔軟なカリキュラムの構築
  - 大学間の連携
  - 入試対策
- c. 人材育成のための教員の質の向上
  - 教員の質の向上
  - 若手教員の育成
- d. 卒業後のフォロー
  - 大学が目指した教育評価と卒業生のフォローアップ
  - 生涯を通して学び続けるフォローアップシステムの再構築

期待する人材を教育するために看護学教育のパラダイムシフト，つまり社会の実情（脱病院中心主義看護）にあった看護学教育をするために，現状の看護教育制度の改革が必要となってきたなど，多くのあり方が話し合われ，整理された。

## ② 大学院教育における人材育成のあり方

- a. 現状の大学院教育の課題
  - 定員の確保が困難
  - 社会人が多く，昼夜開講による教員負担の増加
  - 社会人が多く，長期履修制度を利用した修士の学生の研究指導に苦慮している
  - 修了資格のみを求めて入学してくる学生の存在
  - 社会人学生の背景と能力の多様性により，集合教育が組みにくく，教育効率が悪い
  - 教員の数と質の確保が困難
  - 医学部の中で，看護の独自性が出しにくい
  - 他科と同一の入試のため看護学専攻者が入学しづらい
- b. 修士課程修了生に求められる能力
  - 研究のプロセスを理解し，研究成果を実践に結び付け活用できる
  - 個々の対象者の状況から今後が予測できる

一人ひとりの生活の場に適したケアが提供できる

自己の活動がアピールできる

政策立案できる能力

リーダーの育成

コーディネーション能力

c. 大学院教育改善の方策

複数大学が協力して連合大学院としてはどうか（大学院間のネットワーク作り）

社会全体としての改善方策

社会の間違った認識の修正に対する PR

大学院生に将来を見据えたキャリアを示しうる教育内容

研究・教育能力を高めるためのカリキュラムの強化

大学院教育への理解を促す使命と役割をしっかりと認識する

ケア提供の場の拡大

[4] まとめ

学部教育は、各グループ間で合意点も多く見出され、卒業生に期待される人材像がかなり明確に出されている感があり、大学における看護学教育は充実しつつあるという印象が残った。

それに比べ、看護学の大学院教育は、歴史が浅いことや多様な背景や条件を抱えた社会人を受け入れていることから、3つのグループの発表の結果からは、人材育成のあり方について学部教育ほど明確な人材像が示されなかった。人材育成のあり方の方向性をまとめるというより、現状の問題点が明らかにされたという印象が残った。大学院教育をする大学では、多くの混沌とした問題を抱えていることが、全体討議の中から伝わってきた。こうした、問題解決の一つとして、学部卒業生の大学院進学率を高め、入学者の質を上げる必要があるようだ。司会者からは、看護系大学卒業生の大学院進学率が他の学部に比べ少ないことが示されたが、その理由はまだ定かにされていない。今後は卒業生に、大学教育と大学院教育の継続性を意識させる必要性があるのではないかという提案もなされた。

3日間のワークショップの参加から、日本の看護学教育の実情を理解することができた。特に、大学院教育は全国的に共通する問題が存在することを知ることができた。こうした結果を本学科の教員と分かち合い、本学の看護学教育を検討する一助とできれば幸いだと考えている。

### 4.3.3 法政大学第4回FDシンポジウム

主催 法政大学FD推進センター 第4回FDシンポジウム

研修および報告者 菊沢正裕（情報センター）

#### ■ 研修内容

##### (1) シンポジウム概要

テーマ：大学教育に役立つ評価—GPA，授業評価の活用法とその実践

日時：平成18年11月21日13:00～15:00 講演15:15～17:00パネルディスカッション

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス（東京都千代田区富士見2-17-1）

参加者：80余名

講演概要

コーディネーター：藤田哲也氏

（法政大学FD推進センター・プロジェクトリーダー，文学部助教授）

##### 1) 「大学教育における評価のあり方とその活用——評価を評価する視点」

大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

大学の教育評価は入学試験，成績評価，学位認定である。入試は高校との連携が，それ以外は社会との連携が必要である。しかし，社会は「大学に教育を任せられない」といっている。社会の信頼を回復するために厳格な成績評価が不可欠である。

##### 2) 「GPA 得点分布公表と教育改革」

圓月 勝博（同志社大学教育開発センター所長）

同志社大学では，2000年よりFD委員会でGPA導入の検討を開始，教育開発センター発足の2003年より評価を実施。2006年度，「情報環境の整備と成績評価の厳格化-学習支援システムDUETとGPA得点分布公表-」で，文部科学省の特色GPに選定される。その実践例を講演。

##### 3) 「学生の学習を支援・促進するための成績評価制度作り」

西垣 順子（大阪市立大学大学教育研究センター助教授）

前任地の信州大学教育システム研究開発センターでの実践例を報告。厳格な成績評価と授業評価には形成的評価（フィードバックをかけながら授業・学習を改善する）の視点が必要。

##### (2) 厳格な成績評価とGPAに関するポイント

##### 1) 大学教育の信頼性回復

社会は大学教育を信頼していない。信頼性を回復するためには，教育内容を公開し，透明性を高めなければならない。授業の中身と評価基準を表すシラバスと，厳格な成績評価の結果を公開する必要がある。両者は，車の両輪である。

##### 2) なぜGPAか？

- ・国際的互換性が高い。
- ・GPAでなければならない理由はない。ただ，GPAのような新しい方式を導入すると教育についての議論を始める契機となりやすい。



### 3) GPA導入のメリット

- ・ シラバス同様, 議論や公開によって隣の先生の授業の中身がわかり自己の授業改善につながる
- ・ 評価の統一性, 公平性が向上する
- ・ 大学の授業についていけない学生を早期に発見し, 指導できる
- ・ 同志社方式(ドロップアウトした授業のGPA=0を, その学生のGPAに組み込む方式)では, ドロップアウト率が改善される
- ・ 優秀なGPAを修めた学生を表彰し, 学習意欲を刺激する
- ・ 就職や留学にGPAは利用できる

### 4) GPA関連情報

- ・ 何を契機に「厳格な成績評価」やGPAが取り上げられるようになったか. 大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について(2002. 10.26)」の中で, 「…厳格な成績評価については, 例えばGPAと呼ばれる制度を活用した取組…厳格な成績評価の実施により最低限の質の確保を行うと同時に, 優秀な成績を修めた学生には表彰を行うなど, 学生の意欲を刺激するような仕組みを導入することも重要である…」
- ・ 100点満点方式とGPA(4段階)の学力を比較する研究によると, 両者の差はあまりない.
- ・ 大学審議会答申では, GPAの利用例として退学勧告をあげている. しかし, 現実には退学勧告に利用する例はなく, むしろ教師や学生の問題点を早期に発見し, 助言により教育または学習の改善を支援する契機となることが多い.
- ・ GPAの導入大学は, 163校(23%, 2003), 2006年は200校以上, 30%に達する模様. なお, シラバスの導入大学は690校(98%, 2003)である.

### (3) 同志社大学のGPA導入と公表

#### 1) GPA導入に至った経緯 <http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/gpa/>

- ・ 「ブラックボックス化した成績評価を公的な議論の対象とすべき」との観点から2000年に検討を開始.
- ・ 従来, 学生用成績通知書には100点満点制度, 対外用成績証明書には優良可制度を適用. GPAによって成績通知書と成績証明書の基準化を図り, 両者の一本化を達成する.
- ・ 学習意欲を向上させるために優の2分化による成績上位者の奨励制度を設ける.
- ・ 安易な履修登録を抑制するために, 不合格科目成績のGPAへの算入を行う.

#### 2) GPA得点分布の公表

- ・ 教員の意識向上
- ・ 学生の自己評価奨励
- ・ 成績の信頼性向上

以上を達成する目的で, 全科目の, 教員名, 受講者数, クラスのGPA割合, シラバスを学外に開示している. <http://compass.doshisha.ac.jp/info/gpaindex.jsp>

## 5. 調査研究 – 厳格な成績評価について –

### 5.1 「大学改革実践プログラム C-19 成績評価の厳格化」への対応

FD 報告書 2005 では、中期計画の教育プログラムに係わる取組を整理し、そのなかの C-19 成績評価の厳格化に関する議論と、その前提としての調査を行った。ここに、同報告書の調査結果 (pp.113-114) のポイントを再掲すると、2005 年度前期単位取得科目数は、1, 2 年生が 12 科目、3 年生は生物、海洋、看護の各学科が 10~12 科目、経済経営学科 8 科目、社会福祉学科は 4 科目である。そして、4 年生はほとんど単位を修得していない。次に、履修登録したが単位を修得できなかった科目数の割合をドロップアウト率とすると、海洋生物資源学科と看護学科以外の 4 学科は、学年を追ってドロップアウト率が高くなる。海洋生物資源学科と看護学科は、逆に 1 年生のドロップアウト率が高い。これはキャンパスの事情や 2 年生以降の実習等のカリキュラムの特性によるものと推察する。いずれにせよ、1, 2 年生で過剰に単位を取得し、後半はコース学習をしない、能力以上の科目数を履修登録する傾向が見られる。これは学生、教員両者にとって好ましいことではない。同報告書では、このほか成績の上位、中位、下位の学生の履修登録科目数と単位取得科目数についても調査している。1 学期だけの分析ではなるが、GPA によって科目数の上限を定める CAP を最初から否定する状況にはない。

GPA に関する議論は、学部や教務委員会でも一向に取り上げられない。大学改革実践プログラムの 2006 年度取組としても、「GPA の導入は、調査しながら慎重に進める」とされている。一方、FD 関連シンポジウムやフォーラムでは、毎年のように厳格な成績評価がテーマとして取り上げられている。そこで、今年度は、その一つである、法政大学 FD 推進センター主催の FD シンポジウム「大学教育に役立つ評価—GPA, 授業評価の活用法とその実践—」に参加し、その資料をもとに FD 部会で、このテーマに関する理解を深めつつ、昨年に続いてわずかではあるが議論した。

### 5.2 厳格な成績評価と GPA (第 4 回 FD シンポジウム資料より抜粋)

#### (1) シラバスと厳密な成績評価はペア

授業の中身と評価基準を表すシラバスと、厳格に成績を評価することの両者は、車の両輪である。これを学生に明確に示すこと、および学外にも開示することが求められている。

#### (2) なぜ GPA か？

- ・重要な点は、学年あるいは 4 年間の全成績が数値化され平均値が算定されることである。
- ・段階は柔軟に設定されている。

例 学部 : A,B,C,D,F 大学院 : S,A,B,C,D,F あるいは A+,A,B+,B,C,D,F など

- ・素点評価と遜色がない (後述)。
- ・互換性が高い。

国外で従来から普及している GPA は、最近国内でも急速に普及 (後述) している。

- ・ GPA でなければならない理由はない。

しかし、GPA のような新方式の導入は、教育についての議論を始める契機となりやすい。

### (3) GPA導入のメリット

- ・ 評価の統一性，公平性が向上する
- ・ 優秀なGPAを修めた学生を表彰し，学習意欲を刺激する
- ・ GPAは就職や留学に利用できる
- ・ 授業についていけない学生を早期に発見し，指導できる
- ・ 同志社方式（ドロップアウトした授業のGPA=0を，その学生のGPAに組込む方式）では，ドロップアウト率が相当減る実績が示されている．
- ・ 授業改善につながる．シラバス同様，議論や公開で他の先生の授業の中身や評価方法を意識し改善努力が始まる．

### (4) GPA関連情報

- ・ 何を契機に「厳格な成績評価」やGPAが取り上げられるようになったか。  
大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について（2002年10月26日）」の中で、「…厳格な成績評価については，例えばGPAと呼ばれる制度を活用した取組…  
厳格な成績評価の実施により最低限の質の確保を行うと同時に，優秀な成績を修めた学生には表彰を行うなど，学生の意欲を刺激するような仕組みを導入することも重要である…」
- ・ GPAの導入大学は，163校（23%，2003），2006年は200校以上，30%に達する模様．なお，シラバスの導入大学は690校（98%，2003）である．
- ・ 大学審議会答申では，GPAの利用例として退学勧告をあげている．しかし，現実には退学勧告に利用する例はなく，むしろ教師や学生の問題点を早期に発見し，助言により教育または学習の改善を支援する契機となることが多い．
- ・ 100点満点方式とGPA（4段階）の学力を比較する研究（テスト学会）によると，両者の評価法としての機能差が小さい．

## 5.3 GPA導入に関するFD部会における議論

### (1) 平成17年度第3回部会（2005年8月2日）の議論

- ① 授業評価や公開授業の実績をもとに教育成果の検証方法を考えるべきである．
- ② GPA・CAPの適用事例を学習するなかで，経済学部からCAPが教育上好ましくないとの強い意見が出た．その結果，GPA導入については時間をかけて検討を進めることとした．
- ③ 教員の成績評価方法のばらつきをどうするかといった議論とともに，教育プログラム（テストの仕方，履修ナビゲーション，1コマの時間数や学期制など）を検討する必要がある．
- ④ 教務委員会の大学改革取組みテーマでもあるので，教育成果とともに教務委員会でも積極的に検討するよう申し出る．

### (2) 平成18年度第3回部会（2006年12月21日）の議論

法政大学主催の第4回FDシンポジウム「大学教育に役立つ評価－GPA，授業評価の活用法とその実践」に基づいてGPAのポイントについて学習した（別紙）．GPAと厳格な成績評価についてのいくつかのポイント（評価の統一性・公平性：シラバスの目標の達成度で評価を行うことにより異なった科目間での評価に一貫性をもたせる／授業についていけない学生の早期発見が可能：GPA=0として換算するため／同志社方式（ドロップアウトをGPA=0とする）だと，学生の

科目履修率が高まる...など) について議論した。

### (3) 平成18年度3回部会後のMLに投稿された意見

#### [私見1]

GPA制度が、完全な制度ではないとしても、その導入には一定の意義があると考えます。GPA制度導入の意義の一つは、教員が自己の成績評価のあり方を自ら点検するきっかけ（あるいは、視点）を提供することにある。また、現状では、教員は、基本的には、自己の授業の履修者の成績しか把握していないが、GPA制度の導入により、「平均値」の限界や「誤差」はあるにせよ、個々の学生の成績の全体像を大まかに把握することが可能になり、よりの確な履修指導を実施することができる。

#### [私見2]

GPAの機能としてよく唱われていることとして「成績評価の厳格化」だけでなく、平均点のポイントをターゲットにしてインセンティブやペナルティを設ける「公平性」に関わる機能があります。実際、JABEEの審査委員からGPAの導入についてもこの点でご意見をいただいております。「現在の成績評価方法でよいと考えている」わけではありませんし、生物海洋両学科でもこの件については継続審議中です。100点満点の評価でも制度としての「成績評価の厳格化」や「公平性の実現」は導入可能であり、生物資源学部では既に独自の成績評価制度を作っていることや、今後も教員の貢献度評価の仕組みが必要とされていることなど、GPA導入の基本的な部分での対応については他の部局より進んでいるかと思えます。しかし、全学でGPAを導入するとすると、本学に導入した場合の「成績評価の厳格化」や「公平性の実現」のメリットがなにか、そのメリットを享受するためにはどのような制度設計が必要か、などまた一からの議論となります。その場合に独自の評価システムを全面改定してまでGPAに参加とは簡単にはならない、ということが前回発現の主旨です。事務局の全面的なサポートが得られるのならこうした作業の負担軽減ということで説明できるかもしれませんし、導入により他部局との意見調整もやりやすくなるかもしれません。しかし、独法化の中で事務局のサポートがどこまで得られるのかは未知数だと思います。以上、学部の都合ばかりで申しあげてすいませんが、40人程度を相手にきめ細かくサポートをすることが求められている中で、GPA導入のメリットが明確ではないというのが本音です。時代の流れもありますので導入が必然ということであれば、考え直すべきかもしれません。

#### [学部の状況]

- ・ 経済学部：今後、「厳格な成績評価」についての経済学部独自の視点と方法を提案する。
- ・ 生物資源学部：GPAは、「成績評価の厳格化」だけでなく、ポイントの平均点をターゲットにしてインセンティブやペナルティを設ける「公平性」に関わる機能がある。JABEEの審査委員からGPAの導入に係わる助言もあり、両学科ともに成績評価方法について協議中である。
- ・ 看護福祉学部：「厳格な成績評価」についての明確な方針は現在ない。
- ・ 学術教養センター：今のところ、議論を行っていない。

## 6. 回顧：FD 部会を閉じるにあたって

2002年に教務委員会にファカルティ・ディベロップメント（FD）のためのワーキンググループが発足し、FDのあり方について調査と議論を重ねた末、2003年度に教務委員会の専門部会としてファカルティ・ディベロップメント部会（FD部会）が創設された。そして坂田幹男経済学部長（当時）が初代FD部会長として授業評価、授業公開、FD研修の事業基盤を固められた。2005年度よりFD部会長を交代した。事業内容に関する学内の合意をさらに確かなものとして定着させることを目標に活動し、ようやくFDがフリッピーディスクではなく、授業を改善しながら教育効果をあげる重要な活動であるとの認識を持ってもらえるようになった。

法人化にともなう組織替えのために、2006年度をもってFD部会を閉じるにあたり、最終のFD部会（2007年3月6日開催）において、これまでの部会活動を振り返って意見交換をした。以下は、そこでの議論を整理要約したものである。ただし、要約の性質上、発言者の真意を正確に伝えられていない部分がありうることをお断りしておきたい。

### (1) 授業評価

- 定着するにともない、ややマンネリ化する傾向も見られるが、教員の意識改革のためにも継続することが重要である。
- 結果について平均だけでなく標準偏差を算出することに意義があった。
- 経年変化を見るかぎり、教員に改善の実感があるか否かはともかく、改善の方向が見られるとあってよいのではないか。
- しかし、同じ授業を複数回受講した学生などから、悪い評価を受けても実際に改善されていないという声を聞くことがある。
- 学生の関心は、良い授業ではなく、特に評価の悪い教員に向けられることが多いことから、評価が改善につながらないという不満が出やすいのではないか。
- 設問用紙、解答用紙ともに大量の残部があるのはどうしたものか。
- 設問用紙、解答用紙ともに、科目等を特定する記載はなく、設問が不変であれば、次回に再利用することが可能である。
- 受講学生へのフィードバックという面では、学期末だけではなく、15回の授業の中途での評価が有益なのではないか。
- 学期末の評価と中途での評価は、それぞれの評価の目的自体が違うことを認識すべきである。
- 中途での評価では、速度・難易度・板書など方法論を中心に、できるだけ簡易な方式が理想である。
- WebCTなどを活用すれば、教員の負担も減少し、WebCTの利用促進にもつながり、良いのではないか。
- いずれにせよ、学期末の評価は継続すべきであり、中途と2回実施にするのであれば、中途の評価は、学生の負担が少ない方法行うべきである。最初は、質問カードのようなものでもよいのではないか。
- 「ゆとり教育」世代の入学にも関連して、学生の学力の二極分化がさらに進行することに

どう対応すべきかが課題である。

- 成績上位の学生を伸ばすことと成績下位の学生の救済のどちらにより力点を置くかについて、本学の方針を考える必要がある。

## (2) 授業公開

- 経済学部で FD に関心が薄れているのは、法人化に関連した大学運営の改革との関係で、教員の当事者意識が薄れたことの反映ではないか。
- 法人化関連の議論で疲弊し、授業改善に力を注げないという面もあった。
- 一部の教員の善意とやる気だけに頼るやり方には限界がある。授業公開への参加実績を研究費の配分に若干でも反映する仕組みなどを考えないといけないのではないか。
- 授業評価でも結果を研究費等に反映させないという条件でようやく全学的に実施できたのであり、授業公開への参加実績の研究費などへの反映は困難ではないか。
- 授業公開への参加に何らかのインセンティブを与える必要があり、Best Teacher 賞などの表彰制度の設置を検討するのがよいのではないか。その際には、授業参観のみでも表彰の際の評価に加点する仕組みとする。
- 各部局内で積極的に参加を呼び掛ける必要がある。もっとも、他部局の授業公開の参観でも学ぶところは大きい。

## (3) FD 研修

- 研修のテーマが教員の問題関心に沿うものであれば、多くの参加者が見込める。教員の問題関心を知る方法を考えることが必要である。
- 研修を通じて、部局間または事務職員と教員の間で意思疎通をはかり、コンセンサスを形成することが重要である。
- 複数の部局に関わる課題や事務職員と教員が共に取り組むべき課題の認識が重要である。

## (4) 本学の FD の課題

- 問題を抱えた教員のサポートに、より積極的に取り組む必要がある。
- FD には、どのような学生に育てたいのかについて、学内の共通認識が不可欠である。
- FD 部会には、カリキュラムの改善提案などもう少し権限が必要だったのではないか。
- 来年度から、FD は、FD 部会ではなく、新設の「教育・学習支援チーム」が担当する。教育・学習支援チームは、副学長（理事（教育））を責任者とした、独立した組織になることから、FD と教務のより円滑な連携が可能になるのではないか。
- FD のさらなる進展のためには、全学的にトップダウンで進めることも必要ではないか。
- 単純にトップダウン的な方法ではうまくいかず、むしろ教員の反発を招くおそれがある。
- トップダウンで決めるというのではなく、大学全体の視点から、本学のおかれている状況を教員に伝え、FD の必要性を理解してもらうことが必要である。
- 大学全体が FD への関心を高め、教員同士の問題共有が必要である。
- 多数の大学が参加する FD フォーラムなどに多くの教員が参加することで、大学における FD 推進の全国的な潮流を感じることも重要である。

## おわりに

平成 14 年度に教務委員会のワーキンググループのメンバーとして本学における FD のあり方の検討を始めてから 4 年あまりにわたって FD に関わってきた。ようやく本学の FD も軌道に乗ったとの思いがする一方で、残された課題も多いと感じている。

学生による授業評価、授業公開、FD 研修などが定例的なイベントとして行えるようになったことは成果であるが、授業公開や研修が一部の関心のある教員だけに関わるものにとどまっていることは、これからますます大学における授業のあり方が問われるであろう状況の中で、なんらかの策を講じる必要があるのではないかとと思われる。

もちろん、FD は、あくまで各教員が自主的・主体的に授業改善を行うのを支援するものであり、強制的に授業の改善を行わせるものではない。それゆえに、結果として、これまでの FD 活動によって、本学でも改善に意欲的な教員だけでもサポートができる体制を整えることが出来たことをもって、まずはよしとするべきかもしれない。

しかしながら、授業の改善というのは、自分の授業のあり方について、常にもっとよい方法があるかもしれないという反省的な意識を持ち続けていくプロセスである。そして、FD の本質的な成果とは、本来は、各教員が反省的な意識を持って授業に関わり、そうした授業への意識を共有するようになることであろう。そうした観点からすれば、本学はまだままだであると考えられる。授業評価や授業公開のように、具体的な行事として活動が定着した分、かえって、そうした行事をこなすことが FD であるかのような意識が生じ、本質的なものへの間を欠いたままになっていく恐れもあるだろう。新年度からは大学院で FD が義務化され、翌年には学部でも義務化される。義務的なものになればなるほど、形式的にこなすだけのものになっていく可能性は否定できない。

具体的な活動という点では、成績評価のあり方についての取り組みが今後に残された大きな課題であろう。この点については、GPA の導入の検討ということになるだろうが、GPA は単に成績の点数化だけではなく、アメリカの大学制度を前提としたシステムであり、そのまま日本の大学に導入できるものではないだろう。しかしながら、成績の指標化をもとに、学生の成績状況を把握し、状況に応じた履修指導を行い、学生に大学での学習の確実な成果を得させるという GPA の目指すもの自体は、本学においても、なんらかの形で取り入れていくことが望ましいと考えられる。もちろん、そのために取り組むべき課題は少なくない。履修指導のベースとなる成績の評価のあり方について、という大きな問題もある。これなどは、議論では、おそらく全学的な合意を得られるようなものではないだろう。また、カリキュラム、シラバスの再検討や、履修指導やガイダンスなどで細かな学生指導を行う体制の確立があって初めて意味をなすことを考えると、本学の限られたスタッフで行っていくには、負担が大きすぎるかもしれない。

教室で目の前に座っている学生達に、一人でも多く、より深く、「わかる」ことの面白さを実感してもらうようにすること。個人的に FD とは、そういうことだと思っている。そして、それは、日々、学生達に向かい合っている者なら、誰でもが持っている意識ではないかと思う。この意識にしっかりと根を張った FD 活動を、本学でどのように育てていくべきなのか、まだまだ答えは見つからないというのが、私のささやかな FD 活動への関わりを振り返った時の感想である。

田中 求之（経済学部）





ファカルティ・ディベロップメント報告書 2006

---

---

2007年3月31日 初版第1刷発行

編者 福井県立大学教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会